伊予路

No. 155

［平成31年３月］

愛媛県公民館連合会

表　紙　写　真

愛南町初！　国指定史跡　伊予遍路道観自在寺道（松尾坂峠）

平成30年10月15日、旧遍路道の松尾坂峠が、「伊予遍路道観自在寺道」として国の史跡に指定されました。愛南町では初めての国の史跡になります。

観自在寺道は、四国八十八箇所霊場第39番札所「延光寺（高知県宿毛市平田町）」から、県境の峠を経て第40番札所「観自在寺（南宇和郡愛南町御荘平城）」に至る旧遍路道です。

県境の峠の標高は最高で約310mにもなり、地域では古くから松尾峠または松尾坂と呼ばれています。古来より、伊予土佐間の主要な往還道としての機能を有しており、伊予遍路道の起点としても位置付けられています。

今回、この観自在寺道のうち、県境の松尾峠から愛媛県側の1,544.2mが国の史跡に指定されました。

これぞまさしく、「伊予路」ではないでしょうか。

伊予路　155号

〈目　　次〉

◎　表紙写真　《愛南町初！　国指定史跡　伊予遍路道観自在寺道（松尾坂峠）》
◇「公民館の昨日・今日・明日」……愛媛県公民館連合会　会長　永原　　修…2

《公民館運営審議会委員からの提言》
◇「社会の変化に対応できる共助の要」
……新居浜市地域交流センター運営審議会　委員　大西　政年…3
◇「運営審議会委員として」……内子町立五十崎自治センター運営審議会　委員　福積　秀樹…4

《きてみなはいや　おらが公民館》
◇「今治市中央公民館の新規事業の紹介」……今治市中央公民館　事業係長　川又　　望…5
◇「地域のみなさんと支え合う公民館」……伊方町中央公民館　主任　岡本　由香…7

《つどう・まなぶ・むすぶ》
◇「登る山は高いほど楽しい」……東温市中央公民館　重信コーラス　大西　としえ…10
◇「過疎地域の新たな挑戦！「義民の精神」で地域づくり！」
……鬼北町立日吉公民館　日吉一希を起こす会　会長　中川　博之…11

《優良グループ紹介》
◇「進取の気風で作品作りに取り組む「表装クラブ」」
……西条市徳田公民館　表装クラブ　クラブ長　桑村　英俊…13
◇「地区に合った健康づくり活動の実践「中浦地区健康を守る会」」
……愛南町中浦公民館　主事　小埜山　武士…14

《館長さん　こんにちは》
◇「松山市八坂公民館　小川　勲　館長さんにご質問」
……質問者　松山市八坂公民館　主事　田邊　裕貴…16
◇「宇和島市立天神公民館　西田　稔　館長さんにご質問」
……質問者　宇和島市教育委員会生涯学習課　課長補佐　内升　幸記…17

《元気な主事さん》
◇「金生公民館の紹介」……四国中央市金生公民館　主事　白川　文統…19
◇「私の元気の源は…」……八幡浜市立川上地区公民館　主事　楠　　理恵…20

《郡市公連だより》
◇「ふるさとへの思いを育む公民館活動」…砥部町ひろた交流センター　専門員　野澤　勇一…21
◇「よりよい公民館活動を目指して」……大洲市中央公民館　主事　髙橋　奈緒…22

《第30回全国公民館セミナーレポート》……新居浜市立新居浜公民館　主事　仲村　康子…24
《平成30年度愛媛県公民館研究大会》……27
《県公連だより》……59
《愛媛県公友会について》……61
《編 集 後 記》……62

公民館の昨日・今日・明日

愛媛県公民館連合会　会長　永原　修

今年は、三十年にわたる平成という時代が終わり、新しい時代が幕を開ける歴史的な節目の年であります。公民館も、戦後からおよそ七十年にわたり地域住民の活動の場として、社会教育の推進や地域コミュニティの形成に大きく貢献してきました。

近年、少子高齢化の進展や家族形態の変化、価値観の多様化などにより、地域社会の中で人間関係が希薄化してきたとの声がある中で、公民館は、しっかりと地に足をつけ、地域住民の学習・活動の拠点としての役割を果たしているところであります。

今後、より多様で複雑化する課題と向き合いながら、持続可能な社会づくりを進めるためには、住民自らが担い手としてその運営に関わっていくことが、これまで以上に重要となってきます。私たちは、これからも公民館が積み重ねてきた伝統と実績を誇りとし、人づくり、地域づくりに邁進していかねばなりません。

また、愛媛県公民館連合会においては、こうした時代の趨勢の中で、二〇二〇年度に開催される全国公民館研究集会愛媛県大会で、実り多い成果が得られるよう鋭意準備を進めているところです。

さて、私が館長を務める三津浜公民館のある「三津浜」は、江戸時代から松山藩の船手組の拠点として、また、廻船、商業の町として栄えてきました。現在は、重要港湾の松山港をはじめ、松山市西部の公共施設が集中する地区で、港湾施設を除く一平方キロの中に、西警察署、西消防署、支所、公民館、小・中学校、幼稚園、保育園、神社（三）、寺（七）、教会（三）があり、世帯数二千百のコンパクトな地域です。

三津浜公民館では、年間を通じて各種講座を開いており、なかでも子ども茶道（裏千家）教室は、月四回のお点前で十四年間の歴史があり、今では、教室で高校生の先輩がお点前のお手伝いをしています。また、ペン習字、絵手紙、美術などの教室では、高齢者の方々が楽しく参加しているほか、恒例のマージャン大会では、引きこもりがちな高齢者を含む二十八名が楽しい一日を過ごしました。

こうした中で、今年の成人式は、若者の公民館活動への参加を促すため、『自分たちで』と呼び掛けたところ、自主的に実行委員会を立ち上げ、企画・運営し、今までにないすばらしい成人式になりました。この経験を踏まえ、日ごろ公民館に関わっていない若者に、公民館を知ってもらう努力を、これまで以上に進めるとともに、地域住民の方々の主体的な参画を得て、将来に渡って永続的な公民館活動が展開されることを願っています。

三津の渡し舟

子ども茶道教室

マージャン大会

公民館運営審議会委員からの提言

社会の変化に対応できる共助の要

新居浜市地域交流センター運営審議会　委員　大西政年

地域活動に関わり合いを持ってから、何年が経つのだろうか？若者と期待されていた私も、四十四歳になりました。中堅といったところでしょうが、高齢化する地域社会と照らし合わせると、まだまだ若い世代であるには違いないと思います。

私は、新居浜市の金子校区に住んでいます。校区には、金子小学校があり、地域交流センター（旧公民館）があります。その地域交流センターの運営審議会の委員を仰せつかっているのですが、私自身、地元の人間ではありません。そんな私を暖かく迎え入れてくれた金子という地域で、いろいろな人とのつながりの中で、自分の中に育ってきた地域に対する価値観について、共有したいと思います。

地域活動は、どろどろとした側面を持ち合わせています。ただ、このことはとても自然なことであると思います。様々な価値観の人が暮らす地域において、すべての人が同じ考え方ということはありえません。一人ひとりが違う人間であるからこそ、衝突が起きます。大いに結構、私はそう思います。

社会の変化が早く、また激しい時代を生きていることが、さらに多様な価値観を創り出します。情報化が進み、多種多様な情報を最新の技術を使って、いとも簡単に手に入れることができる時代になりました。情報格差と情報過多が同時に起こっています。一方的な情報発信に限界を感じつつ、確実に情報を届けるためには、口コミが有効な手段となっている所以であるとも思います。

また、身近なところでのイベントも数多く開催されています。豊かさの象徴と言いましょうか、日々楽しいことが繰り広げられている娯楽に溢れた社会に生きている私たちにとって、地域行事とはどのような意味を持つのでしょうか？

それは、地域住民の交流の場であり、人と人とのつながりを創る場であります。しかし、参加する地域住民の減少といった課題は、どこの公民館でも抱えている共通の課題ではないでしょうか？また、いつものメンバーしか参加していないといった悩みもあるかもしれません。しかし少なくとも、その行事の企画、運営、準備、片付け等に参画する人たちとっては、確実に交流が生まれる機会であります。それ故に、多様な団体が関わり合って、運営される場合が多いのだと思います。マンネリ化と言われようが、地域を支える人のつながりを創る貴重な機会が確実にそこにはあります。

人口減少社会において、これまでできていたことができなくなってくるかもしれません。社会の変化に合わせて、これまでのやり方を変える必要もあるかもしれません。

このような社会において求められることは、その歴史の中で培われた文化を守り、伝えるということであると思います。それが、先人達が築いてきた共助のネットワークという精度の高い仕組みであると思います。

共助のネットワークが役割を果たすのは、大規模災害等の想定外のことが起こったその時であると考えます。多様化する社会において、命の営みをつないでゆくために今、俯瞰的な視点と切り口を変えた価値観と向き合い、話し合いを重ねることが、地域に求められると感じます。

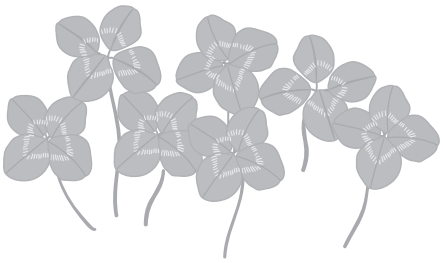
運営審議会委員として

内子町立五十崎自治センター運営審議会　委員　福　積　秀　樹

内子町は平成十七年に旧内子、五十崎、小田の三町が合併となる。合併前に三町すべて自治会制度を発足させ、従来の公民館活動は町内の五つの自治センターがそれぞれの地域の中心となって推進することとなる。各自治センター配属の職員については決して多いとはいえず、少人数で自治会活動の支援に始まり、生涯教育の推進、文化活動の支援、社会体育の振興、人権・同和教育の深化、青少年の健全育成と多岐にわたり活動を続けている。地域住民としては頭の下がる思いだ。

平成二十七年四月、私はその町内自治センターの一つ、五十崎自治センター運営審議会委員を委嘱され、務めることとなった。それまではずっと公立学校事務職員として小学校や中学校の教育現場で勤務してきた。教員とは異なる視点ではあるものの、学校教育、特に義務教育についてはある程度理解をしてきたつもりだ。しかし社会教育の分野、自治センターの活動については、今までもろもろの行事等には積極的に参加をしてきたが、表面的な部分しか見ておらず、安易な参加者の立場でしかなかった。運営の全体像、趣旨や目的といった根底にあるもの、スタッフが抱える苦労などは、到底考えが及ばなかったのである。運営審議会に参加するようになり、自治センター活動について少しずつではあるが考えていくようになった。今後も活動全般について広く目を向け、的確な意見を提供すること、また広範囲に及ぶ自治会活動を支えている各職員に、微力ながらでも力添えできるよう、私自身、日々研鑽に務めたいと思う。

話が個人的になってしまうが、私は若いころからずっと音楽活動を趣味としてきた。思えば中学時代、吹奏楽部の恩師がすばらしかったからだと思う。打楽器を担当していた私に、音楽活動の楽しさを力強く教えてくれた。おかげで私は音楽を生涯の趣味とすることができた。今は故人となった恩師だが、私は心から感謝している。おかげで現在もその恩師の手伝いがきっかけとなった大正琴グループの合奏活動や和太鼓保存会の演奏活動や運営、十数年来毎年行われる地元中学校文化祭の中学生バンドの指導、そして私自身のキーボード弾き語りの演奏活動等を続けてきた。音楽は、生活に潤いを与え、ひいては豊かな地域づくりにとっても有効であると思い、精力的に活動している。しかし、注意しなければならないのは、こういった音楽などの文化面の催し物や行事などはややもするとその時だけの盛り上がりで成功したと判断してしまい、一過性に陥りやすい点をいつも危惧している。多数の人を巻き込む日々の活動から、なんとか持続的な効果を得られるよう努力していきたい。



きてみなはいや おらが公民館

今治市中央公民館の新規事業の紹介

今治市中央公民館　事業係長　川又　望

一　「十年ひと昔」と言いますが…

私は、平成三十年四月、今治市中央公民館の事業係長に人事異動になりました。と言っても実は、平成十五、十六年度の二年間、現在と同じ中央公民館事業係長として勤務しおてりましたので、いわゆる「出戻り」ということになります。「十年ひと昔」と言いますが、私が以前いたのは、十年ではなく十五年も前になりますので、以前と比べると、中央公民館の事業もかなり変わったなと感じています。

余談になりますが、私は、今年（平成三十年）で満六十歳の還暦を迎えました。長きにわたった市役所生活も平成三十一年三月で定年を迎える年になりました。市役所に勤務している限り、いつ人事異動になるかわからず、その心構えは毎年していましたが、正直言って、定年まで一年になった今年に異動になるとは思っておらず、異動の内示があった時には、まさかと驚き、あわててしまいました。

以前なら、定年で退職というのが普通だったかもしれませんが、最近は、年金受給開始年齢の引き上げなどによって、還暦を過ぎてからも働かなくてはならない社会情勢になっているんだ、と身をもって感じました。

ところで、今治市中央公民館の事業については、伊予路　№一四七（平成二十三年三月）で、矢野明彦館長補佐（当時）が紹介しているところですので、重複を避ける意味からも、今回は、今年度開始した二つの新しい事業について紹介していきます。

二　シルバーコーラス・コンサート

まず、五月二十七日におこなわれたシルバーコーラス・コンサートについてです。

今治市中央公民館の開催している趣味教養講座のひとつにシルバーコーラスがあります。これは六十歳以上の男女を対象に、毎週水曜の午前中、コーラスの練習をおこなっているものです。

このシルバーコーラスは開講して今年で三十年目になります。この節目の年にシルバーコーラスの受講生に、公式な発表の機会をもってもらおうという目的で、初のコンサートを、当館の大ホールにて開催しました。

当日は日曜の午後ということで、一般市民約二百名が観客として集まり、誰もが知って

いるような名曲も含めて二十五曲が演奏され、観客も一緒になって歌うコーナーもあり、おおいに盛り上がりました。

普段の練習とは違って、大ホールのステージで観客を前に歌うことの素晴らしさ、心地よさを味わってもらい、また観客と一体になって、日曜の午後、楽しめるひとときをすごすことができたと思います。仲間と一緒に歌うことによって、高齢者に生きる喜びを味わってもらい、健康にも役立ててもらおうというシルバーコーラスの目的を達成する一助になったのではないかと思っています。

シルバーコーラス

三　ゆかたの着付け一日講座

あと一つは、六月二十九日に開催された「ゆかたの着付け一日講座」です。着物の着付けと違い、ゆかたは夏限定になりますが、着付けの初心者、若い女性の参加も見込んで、気軽に参加できるような一日講座を開講しました。

開講した六月下旬はちょうど商店街の夜店や花火大会などの開催される時期の直前にあたるので、即、講座が実際に役立ててもらえるとの期待をもっていました。また、講座の時間も午後七時から九時、仕事をしている若い女性の方も参加しやすいように夜にしました。

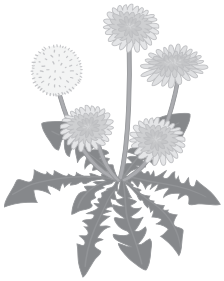
ゆかた着付け

今年初の開講ということで、手探りの状態だったのですが、それでも十五名の方が参加、年齢的にも狙いどおり若い女性の方も多く参加してもらえて、ほっとしました。

一日講座ということで、実際にどこまで習得してもらえるのか不安もあったのですが、当日の出来上がりを拝見させてもらうと、皆、上手に着こなしができており、受講者に喜んでもらえ、役に立つ講座になったのではと自負しています。

四　時代の流れに応じた公民館をめざして

以上、平成三十年度に新規で実施した事業を二つ紹介しました。今治市中央公民館は開館して三十五年が経過し、老朽化も目立つところとなっていますが、実施する事業については、従来からのものにとらわれず、常に新しいものを取り入れていきたいなと思っています。実施する事業について、より多くの人たちに利用され、喜んでもらえるよう、常に見直しをおこないつつ、時代の流れに応じた公民館をめざして、日々、努力していきたいと思います。



地域のみなさんと支え合う公民館

伊方町中央公民館　主任　岡本由香

一　伊方町と中央公民館の概要

伊方町は、平成十七年四月に伊方・瀬戸・三崎の旧三町が合併し、新伊方町としてスタートしました。愛媛県の最西端、豊予海峡に突き出た「日本一細長い」佐田岬半島に位置し、南の宇和海側はなだらかな白砂の連なる海岸、北の瀬戸内海側はリアス式海岸を形成し、気候は温暖で、年間を通じて季節風が強く、風力発電施設が多く建設されています。

当町には、公民館が四館あり、中央公民館は、人口約三千六百人・約千七百世帯を管轄しており、年間平均約一万七千人の利用があります。現在、伊方地区には各行政区ごとに自治公民館が十三館あり、中学校一校・小学校が二校・保育所が二箇所あります。

二　中央公民館の主な活動の紹介

中央公民館では、子どもから高齢者までを対象とした数多くの公民館事業を展開しています。

㈠　中央教室（小学生対象）

年間を通じて四季を感じながら、季節の行事を取り入れ、子どもたちに楽しみながら物作りや体験をすることを目的に実施しております。

四月はタケノコ掘り体験とおえかきひろばです。

タケノコ掘り体験では、近くの神社の裏山で宮司さんを講師に迎え、タケノコ掘りや竹の器と箸作り、タケノコ料理体験を行いました。毎年人気の事業で参加者が多く、タケノコの数が足りるのか心配するほどです。

おえかきひろばでは、絵を描き表現する面白さや作品ができる喜びを味わってほしいと長年町内の方がボランティアで講師をしていただき、「かまぼこ板の絵」展覧会へ作品を出展しています。近年は残念ながら入賞作品がありません。

タケノコ掘り体験

十二月はクリスマスリース作りとクリスマスクッキングです。

好きなリボンや飾りを持参したり、公民館で用意したものを使い、リースを作ります。

クッキングは雪だるまカレーとピンチョス、サンドイッチを作りました。班ごとに分かれて高学年を中心にみんなで協力していました。

一月は書初め教室と七草粥試食会です。

小学三年生から六年生を対象に地元の方を講師に書初めを実施しています。七草粥は食生活改善推進協議会の方に協力してもらい郷土料理などを作っていただき、七草についての説明や昔のお正月の話などをしていただきます。

この中央教室は定着してきたので、毎年子どもたちが楽しみにしてくれています。

㈡　いかたおんがくひろば

毎年四、七、八月に開催していましたが、九月より毎月一回開催しています。

おえかきひろば同様、ボランティアで講師をしていただいています。

〇歳児から小学校低学年の参加があり、親子でスキンシップをとったり、終始笑顔が絶えません。最近人気なのが、スズやポコドリ、マラカスなど役割を決めて合奏をすることです。最初と最後は先生がシャボン玉をしてくれますが、最後のシャボン玉は終わりの合図ということが分かり始め、もっとやりたいという子どもの声があります。お母さんたちも子どもと一緒に楽しい時間が過ごせると喜ん

でもらっています。

㈢ 男の料理教室（成人男性対象）

この教室は、平成二十六年度からスタートした事業です。

公民館事業等に積極的に参加してくれるご婦人と話をしていた時に「中年男性も今は少しくらい料理ができるようになってくれたらいいんだけど」と言われたのをきっかけに事業を開催しました。初心者の方でも簡単に作れる料理を学び、生活技術の向上を図り、地域の絆を深めることを目的とし、壮年会の方を中心に呼びかけて各地区二十代から七十代の方に参加してもらっています。今年度は『酒の肴は自分で作ろう』をテーマに保健センターの栄養士さんや町内の方を講師に開催しています。

おんがく広場1

㈣ 青年学級（二十歳から三十五歳の男女）

これからの伊方町を担う青年層が、有意義な生活と人間関係を学ぶために、職場や友人関係以外で楽しく学習し、新たな発見をすることを目的に開催しています。近年、参加人数が少なく休会状態でしたが、青年層の公民館利用が少ないことが気になり、五年ぶりに復活いたしました。役場職員や地域の事業所等にも案内を出しましたが、やはり参加者が少ないのが現状です。それでも参加を楽しみにしている方もいるので、学級活動を通して交流の場、伊方町の良いとこを知ってもらいたいです。

おんがく広場2

㈤ 紅梅（べにばな）学級

五十代から七十代の女性を対象とし、学ぶ楽しさと参加者同士の仲間意識を持ってもらい、知識を広げ、技術を身につけ、感性を高めることを目的とし、古くからある学級です。

開講式では年間計画を決めてもらいます。第一回目は福祉関係でも取り上げられている、ハンドマッサージを行いました。肌に触れることで健康を促す「心と体の美容療法」として用いられているそうです。参加者の方はお互いに言葉を交わしながらマッサージをし、綺麗になった手や腕を見て喜んでいました。

第二回は地元の方に講師をしていただき、不要なシーツ、Tシャツ、浴衣などを使い布

紅梅学級

草履作りを行いました。編み初めのひも通しや、鼻緒をつけるのは難しくて何度も先生に教えていただきました。横幅を均等にするのも難しく、無言で作り上げていきました。色とりどりの布で大きさもそれぞれ違い、世界に一つだけの布草履となりました。

第三回は町外視察研修ということで、新居浜市の東洋のマチュピチュへ行きました。バスの中では終始笑い声が絶えない賑やかな遠足です。この視察研修では体験事業も行ったりしています。

第四回は調理実習と閉講式です。簡単に早く作れて美味しい料理を講師の方にお願いしてレシピを考えてもらっています。

(六) その他

紹介した事業以外にも老人クラブの方を対象とし、健康で生きがいのある生活を送るために開催している「平成大学」、毎月二回日曜日に地元の方を講師に招き、食器や置物などを作る「陶芸教室」、学ぶ楽しさ、集う楽しさを感じ興味・向上心にお応えできるような内容の「趣味講座」、放課後、子どもたちが公民館へ遊びに来ることが多いので、毎月二回水曜日に工作やゲーム等をして交流する「わくわくクラブ」、各小学校で三年に一度開催する「学舎活動事業（通学合宿）」などがあります。

三　四館合同事業

(一) 子ども英語スクール

次世代を担う子どもたちに、英語に慣れ親しんでもらうことで〝英語＝楽しい〟という感覚を持ってもらい、国際的な視野とコミュニケーション能力の育成を目的としています。町内の小学一年生～三年生の希望者対象に毎月二回土曜日にAコース（一年生）Bコース（二・三年生）に分かれて開催しています。今年度は参加者が多く他校児童との交流ができています。伊方町国際交流員一名と英語が堪能な町内の方一名に講師をお願いしています。

アルファベットの発音、書き方、あいさつなど日常で使う簡単な英語やアメリカの文化を学んだり、ゲームなど子どもが楽しめるような内容となっています。

(二) 佐田岬十三里見て歩き

ふるさと佐田岬の自然や文化に触れながら、苦しさを乗り越え歩くことで、仲間を思いやる心や助け合いの心を育てることを目的とし、毎年八月に実施しています。

町内の小学四年生～六年生を対象に二日かけて町内を約三十二km歩きます。近隣の高校生や女性団体、多数のボランティアのご協力の上に成り立つ伊方町公民館の一大行事となっていますが、今年は例年になく猛暑が続き安全面を考え中止といたしました。

(三) 子どもスキー教室

伊方町では体験することが出来ない「スキー」をとおして、いつもと違った自然に触れ、感性を磨き、体を動かすことの楽しさを実感する、また、自然を知り、自然に親しんでもらうことを目的に昨年度から合同事業としています。町内の小学六年生の希望者を対象に久万スキーランドで実施します。スキー初体験の子どもがほとんどで、ゲレンデを見て大歓声が上がります。少し緊張気味の子どもたちも昼頃にはすっかり笑顔に変わり、何度こけてもすぐに立ち上がり、あきらめずに時間ギリギリまで滑っていました。子ども達には小学校最後の思い出の一つになったと思います。

四　おわりに

私が中央公民館職員となり早、五年が経ちます。

異動してきて一週間後には公運審（公民館運営審議会）の会義を任され、仕事内容や公民館用語も分からず、職員の方に協力していただき無事終えたのを今でも覚えています。

初めは手探り状態で事業等の活動をしながら公民館について学びました。あっという間に一年が過ぎ、公民館職員で良かったと思えるようになりました。とても地域の人との関わりが多く、色々な方と顔見知りになれるということです。他の部署では子どもから老人まで知り合うことはなかったと思います。顔見知りになり、話をするようになることで、他の事業の時などにも気軽に声をかけてくださったり、ちょっとした会話の中でも公民館活動のヒントとなることもあります。時には「忙しかったら何でも手伝うから言ってよ。」と有難い声をかけてくれたり、本当に色々協力していただき、助けてくれることもあります。本当にすごく大切な出会いだと思います。

これからも、地域のみなさんに楽しく学習・交流できる場と機会を提供し、様々な事業を展開していきたいです。

つどう まなぶ むすぶ

登る山は高いほど楽しい

重信コーラス　大西　としえ

「え～四半世紀も歌っとるん？」息子の一言に思わず絶句。

そうなんです。次男の小学校入学を機に誘われるままに入った重信コーラス。その二男も三十六歳。夫の転勤もあったが、二十五年は歌っている事になる。「それにしてはねー」という声が聞こえてきそうだが・・・まずは、我が重信コーラスをご紹介することにしよう。

重信コーラスは、東温市で昭和五十六年に公民館活動として発足した女声合唱団である。団名の由来は合併前の地名「重信町」から・・「おかあさんコーラス県大会」と「東温市文化祭」の出場を主軸に施設の慰問、五年ごとには「記念コンサート」を開催している。

現在、団員は二十二名。指揮・指導は坂本美恵先生。ピアノは西村侑吹子先生。東温市中央公民館を練習会場に活動している。

侑吹子先生は創立以来の唯一無二の伴奏者でとても綺麗な音色で私達のハーモニーを支えてくれる頼もしい存在。美恵先生は四国二期会所属のオペラ歌手でお迎えして七年になる。私の好きな言葉に「一期一会」という言葉があるが、先生との出会いは正にこの言葉どおり。私自身、高校では「書道」を選択。音楽はさっぱりのはずが何となく入った重信コーラスだった。「まあ、みんなで歌うんだから。」と音程の確かな団員に合わせて歌っていた。それでも仲間と奏でるハーモニーは楽しく心地よかった。そんな私に「一人一人の声が聞きたい。」と美恵先生。そうなんだ！一人一人の声づくりが合唱として光を放つ。まずは声づくりから。そうそう！私達は東温市文化協会に所属しているので会場費は無料。使い放題の環境（東温市ってすごいでしょう）善は急げ！今まで週一回だった練習を週

第41回 全日本おかあさんコーラス四国支部愛媛大会
2018.7.1　ひめぎんホール サブホール

二回に。ボイストレーニングにも力を入れる練習が始まった。美恵先生のボイトレは一人一人に則した指導で私には解りやすく、遅まきながら、歌にボイトレにはまる毎日を過ごすことになった。が、現実は厳しい。なかなか上手くいかない私に先生は「山は高いほど登りがいがあるでしょ。簡単じゃあないから楽しいんです。」な～るほど。

そんな私達。三年前には札幌市で開催された「第三十八回おかあさんコーラス全国大会」に出場。愛媛ゆかりの坂村真民作詞の歌を披露できた事は素直に嬉しく、全国の圧巻のおかあさんパワーを体感し、次へと繋がる力をもらえた。

重信コーラス35周年記念コンサート
2017.12.2　中央公民館ホール

また、昨年の十二月には「重信コーラス三十五周年記念コンサート」をホームグラウンドである中央公民館で開催。本番当日は多くの地元の人達で会場は埋めつくされ・・優しく温かい眼差しに包まれ、今の私達の精一杯の歌を届けることができた。

音楽や歌は、味わいたい言葉をより心の奥深くまで沁み込ませてくれる。それは、時に、生きる糧になり、私達を励ましてくれるんだ。

平成は終わろうとしている。時代はますます不協和音に満ちるかもしれない。だからこそ、心ひとつに歌っていきたい。響きあうハーモニーを共有していきたい。そして、仲間と登る山に高みをめざす楽しみを見い出したいんだ！

過疎地域の新たな挑戦！「義民の精神」で地域づくり！

鬼北町立日吉公民館　日吉一希を起こす会　会長　**中川博之**

【会の結成】

日吉一希を起こす会は、市町村合併により鬼北町が誕生する前の旧日吉村において、平成二年に村内若者有志により結成された地域づくり団体です。現在の会員は男性十九人、女性十名、計二十九人です。会員は二十歳前半から六十歳代までの幅広い年齢構成で、職業も自営業、農業、保育士、医師、公務員と様々です。

まずはじめに「一希を起こす会」のネーミングについてご紹介いたします。「一希」の由来は、「元気、根気、やる気」の三つの気と過疎地域の中にあっても一つの希望持って進むという意味です。

それと、江戸時代この宇和島圏域を治めていた吉田藩の領内で起こった、全国的にも有名な百姓一揆「吉田騒動」別名「武左衛門一揆」とよばれる百姓一揆の指導者・武左衛門が旧日吉村出身の百姓であったことから、この郷土の偉大な英雄である「武左衛門」の心意気をぜひ地域づくりに活かしたいという思いも込められています。

ちなみにこの「吉田騒動」ですが、領内八十三カ村の村々から九千六百人といわれる農民が決起し、願い出た要求のすべてが認められるという歴史上稀にみる農民側の完全勝利で幕を閉じた一揆であります。しかし、この一揆の指導者・武左衛門（日吉地区にあった上大野村出身）は、三年後に吉田藩によって捕縛され、処刑となりました。このような一揆の成功の裏には、打ち首となった武左衛門、また、この一揆を鎮めるため藩の責任を一身に負い、集まった農民達の前で切腹した吉田藩の家老・安藤義太夫の尊い犠牲がありました。

一希を起こす会は、自らの命を犠牲にして多くの農民を救ったこの武左衛門の「義民の精神」を受け継ぎ、地域の活性化に生かして

いきたいの思いで活動を行っています。

【活動内容】

「地域おこしとは、地域の伝統・文化・歴史を見直し、掘り起こし、守ることが基本」という考えのもと、様々な取り組みを行ってきました。

ひとくちに「まちづくり」と言っても、それには労力、時間、資金など多大な「犠牲」を強いられます。「義民の精神」なくして地域づくりは語れません。会員もその精神を胸に地域づくりに取り組んでいます。

私達の活動ですが、この武左衛門にちなんだ行事を企画・運営するほか、旧日吉村の各施設や自然を活用した様々イベントを行っています。

主な活動としては、三年に一回開催しているイベントで、百姓一揆の足取りをたどりながら日吉～宇和島まで約五十キロあまりの道のりを歩く「武左衛門一揆の道」や、四万十川の源流・広見川の渓流を活用した「せせらぎ魚っちんぐ」のほか、夢産地で開催されるイベントには毎回出店しています。

【活動の楽しみ】

先に述べたように、会員の年齢・職業は様々。生まれも育ちも日吉村という会員が多い中、都会からのUターン者、町外からIターンしてきた元・地域おこし協力隊、町外出身だが勤務先が日吉内、町立病院に医師として勤務している会員等々。職種は様々ですが、みんな「ふるさとを愛する」気持ちで繋がっています。このように日吉で生まれ育った会員の「内」の目とUJIターンの会員の「外」の目とがうまく融合し、新たな発想も生まれています。イベントの後の慰労会では、反省はもちろんですが、「来年はこんなことをしたい！」など、とにかく分け隔てなく、何でも言い合います。時には意見のぶつかりもありますが、それがかえって一生懸命さに繋がっているようです。

せせらぎ魚っちんぐ・川のお勉強会

【今後の課題】

私達の住んでいる鬼北町日吉地区は過疎・高齢化の進む過疎地域であり、「限界集落」とよばれる集落がほとんどであります。多くの若者が都会へ転出し、貴重な後継者がどんどん少なくなってきています。この結果、多くの農林業者や事業所が後継者不足により廃業に追い込まれ、地域の活力が低下しつつあるのが現状です。こうした中で、この地域を活気ある地域に再生していくためには何が必要かということが新たに問われてきており、私たち「一希を起こす会」としても大きな転換期を迎えているといえます。

武左衛門の「志」をどう生かすかが、「一揆」に通じる「一希」をかなえる「決め手」であり「原点」であることを再認識して、これからの地域づくりの在り方を考え、実践していきたいと思います。

優良グループ紹介

進取の気風で作品作りに取り組む「表装クラブ」

西条市徳田公民館　表装クラブ長　桑村英俊

徳田地区は西条市の西部に位置し、人口は一四三七人、小学校二校、七自治会で構成されています。米・麦や、あたご柿などの果樹の生産が盛んです。徳田地区には地域の先輩が作詞作曲をした「徳田音頭」があり、その一節をご披露して紹介に代えます。

♪

徳田よいとこ　見晴らしゃ千両
雪の石鎚　夕陽を映えて
瀬戸にゃ　白帆が浮くぞいな
アレマ、ホントニ、ソジャノモシ

♪

徳田公民館では、十三のサークルが活動しており、その中の一つに「徳田表装クラブ」があります。表装クラブの「表装」とは、表具ともいい、書画を掛軸や帖（じょう）、巻物、屏風（びょうぶ）、襖（ふすま）などに仕上げる技術で、保存や鑑賞が目的です。この意味通り、私たち表装クラブは書画を掛軸などの作品に仕上げる技術の習得と向上を目指して活動しているクラブです。

現在、私たちが活動している徳田公民館「表装クラブ」の前身は、元講師の高橋良治先生（西条市神拝）が主宰された丹原公民館表装クラブでした。

平成十九年、丹原公民館の新築移転工事を機に活動場所を徳田公民館に移し、平成十九年九月、会員八名で「徳田公民館　表装クラブ」が産声を上げました。

当初、毎月一回の活動でしたが、平成二十年の新年を契機に毎月二回の活動に充実させ、主に書や日本画作品の表装技術の習熟に励んで参りました。活動日は、毎月第一・第三木曜日の午前九時から約三時間です。完成した作品は、徳田地区、丹原町、西条市等の文化祭に参加出品しています。また、機会があるごとに市内の同好者の作品を鑑賞し、新しい技法を見習い、各自の技量の向上を図って参りました。

高橋先生は、新入門者には一通りの手順と技法の解説を行うほかは、あまり細かい点には口を挟まずに見守ってくださり、会員の質問に応えて短いご助言をいただくほか、製作の過程でできてくる本紙のしわの修正などでは、自ら進み出られてお力添えいただきました。

しかし、平成二十八年末に高橋先生がご他界された後は、講師をお迎えすることなく、会員同士が技術の向上に切磋琢磨しながら、賑やかに楽しく活動を続けて参りました。現在、会員は今治方面から参加の女性二名を含む男性三名、女性四名の七名で、四十歳代から九十歳代と幅広い年齢層の会員が活動しています。

このクラブの特徴はと聞かれれば、会員のだれもが即座に「和気藹々」と答えるでしょう。質問をぶつけ合い、遠慮なく助言や加勢を求め、掛け軸のような長尺ものの扱いの折などには、メンバーが総かがりで手を貸し合っています。

また、進取の気風に富む会員の面々は、古い扇面の筆文字を取り出して茶がけに改表装したり、魚子（ななこ：表具用生地）の使い方を工夫し、中風帯（ちゅうふうたい）のような印象を出して効果的な佛具表装に仕上げて見せてくれたこともあります。更には、中国人書家の横被（横開き：日本の巻物風の表具仕立て）の作品を、組子（くみこ：釘を使わずに木を組む技術）を使った座敷扁額に作り替えた例などもありました。古い着物地に裏打ちを施して表装の裂地（きれじ：表具で使われる布の総合名詞）として活用していく例などもよく目につきます。

このクラブは少人数ですが、その中に書に優れた人や絵画に秀でた方が複数おられ、しばしばその作品を拝見したりすることもあります。教室で漢詩の作品などを拝見するたびに、その読み方等についても詳しく解説をお聴きでき、予期せぬ大きな耳学問を得ることも度々あります。

このように好奇心旺盛な皆さんに今後さらに、重点的に取り組んでみたい技法などに質問を向けると、「組子を使った四曲座敷屏風」を作ってみたいとか、徳田では多くの人たちがやっている「柿しぶ染めの裂地や草木染めの裂地が使えたらどんなに楽しいでしょう」など、また難しそうな発想が飛び出してきました。皆さんの経験を出し合ってその可能性を探っていき、夢の実現を果たしたいものです。

私たちは、師匠格の指導者がいないということで、自分たちの自主的な製作や研修活動が厳しさに欠ける面があってはならないと自戒しております。和気藹々の雰囲気と進取の気風を生かしてお互いに切磋琢磨し、技術の向上に励むことこそ、亡き高橋先生のご遺訓であると確信し、今後も会員一同で作品作りに励んで参ります。

地区に合った健康づくり活動の実践「中浦地区健康を守る会」

愛南町中浦公民館　主事　小埜山　武士

愛南町の中浦地区は、町の中心地から西におよそ十三kmの半島部に位置し、まき網漁の遠洋漁業基地があることで知られる漁村地域である。

「中浦地区健康を守る会」は、中浦地区住民の健康を守る活動を総合的に推進しながら、地区住民の健康づくりの推進と保健環境衛生の向上に寄与することを目的として昭和四十四年八月一日に発足した。会の役員は、中浦地区内の各区長と老人クラブ会長、地区児童が通う小学校長、町保健関係職員、地区公民館関係者である。毎年、役員会を開催し健康づくり活動の目標を決め、目標達成のための事業計画を策定している。年度末には総会を開催し、行われた事業に対する反省点、改善点を話し合い、今後の事業に生かせるようにしている。

「中浦地区健康を守る会」の主な事業

①各種健診等の地区住民への周知と支援

特定健診、肝炎ウイルス健診、骨粗鬆症健診、胃がん・乳がん検診及び特定健診指導など、各種健診の周知を幅広く行うことで、地

区住民の受診率向上と健康意識を高めている。また、町の保健師及び栄養士に協力を得ながら各種健診の結果報告会も開催しており、健診結果から生活習慣の改善点に気づくことができるよう支援している。

②「ヘルシー教室・健康体操教室」

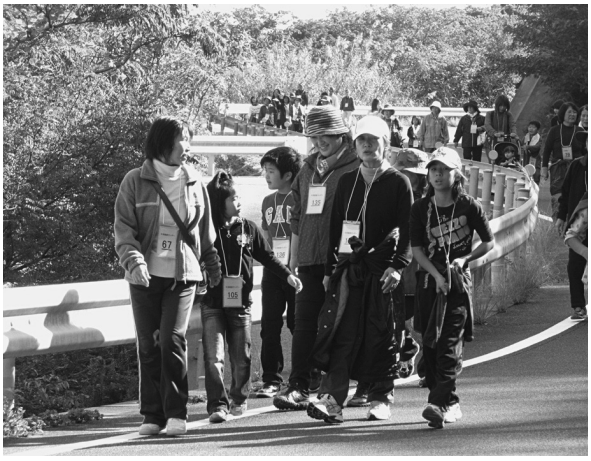
参加者を募り、年三回ヘルシー教室と健康体操教室を同時に開催し、健康づくり活動を行っている。ヘルシー教室では、町の保健師及び栄養士に協力してもらい、生活慣習病予防は食生活がいかに大切かを学習するため、健康的な料理の調理実習を行い、学習した参加者はその料理を各家庭で実践している。健康体操教室では、講師を招き、運動を生活の中に取り入れられるよう、手軽にできる運動を学び、各自が無理をしない範囲で運動を行っている。本年度は、第一回目を九月十日に開催し、「便秘解消メニュー～簡単に摂れる野菜をとろう～」と題した調理実習を行い、「楽しみながら体を動かそう」をテーマに運動実習を行った。第二回目は、十月十八日に「低栄養予防メニュー～フレイル（虚弱）にならないように～」と題した調理実習を行い、「今からでも遅くないロコモ（運動機能低下）予防～毎日続けて筋力アップしよう～」をテーマに運動実習を行った。第三回目は、十二月十四日に「お楽しみメニュー～クリスマスバイキングを作ってみよう～」と題した調理実習を行い、「ヨガでこころもリフレッシュ」をテーマに運動を行った。

③「親子料理教室」

小学生児童に、食生活が体づくり、健康づくりにいかに大切かを学んでもらうため、栄養バランスの取れた料理を親子で協力して調理し、食に関する学習を通して家庭での生活習慣を見直すことができるよう、親子料理教室を開催している。

④「中浦健康サンデー」

毎年十一月末に、地区の子どもから高齢者すべての人を対象にウォーキングをとおしてふれあいの機会をもち、地区住民のつながりと健康意識を高めるために、「中浦健康サンデー」を開催している。「自然の中でさわやかな汗を流しましょう」をテーマに、小学校グランドを出発して地区内を回り、公民館にゴールする五kmのコースを子どもから高齢者までの三世代が会話をしたりしてコミュニケーションをとり、周りの景色を眺めながら、それぞれ自分のペースで五kmの完歩を目指している。健康チェックとして、看護師・保健師による血圧測定等を出発前、中間地点、ゴール後の三回行い、ゴール後は、③で紹介した、ヘルシー教室に参加しているみなさんが調理した料理で、談笑したりコミュニケーションをとりながら昼食をいただき、ふれあいやつながりを深めている。この事業は天候に左右されるため、前回・前々回は小雨によって空模様を気にしながらウォーキングした経緯もあり、本年度は、例年より一週間遅らせ十二月二日に開催した。健康づくりのために地域の方に少しでも運動してもらうという当初の目的を達成するため、もともと五kmあったコースを今回は二km程度短縮した。ウォーキング、昼食の後は、ビデオ上映で健康について学習したり、保健師から各検診結果をもとにグラフ化された地区の検診等の受診率や検診結果の状況などの報告も受けた。また、健康関連用具などを景品とした抽選会も行い、参加者百二十名が健康的な日曜日を過ごした。



⑤「その他の活動」

この「中浦地区健康を守る会」は、健康に関する事業以外にも環境活動として、地区の一斉清掃でゴミ拾いを行うなど、地区の美化に努めて環境衛生の向上を図っている。また、老人クラブ会員と連携し、地区の集会所等の花壇に季節の花を植えて地域を明るく美しく彩っている。

館長さんこんにちは

松山市八坂公民館 小川 勲館長さんにご質問

松山市市八坂公民館
主事 田邊 裕貴

★自己紹介をお願いします。

昭和二十八年松山市八坂地区で生まれ、育ちました。学生時代の四年間を大阪で過ごした後、八坂へ戻り、自営業を営んできました。子どもが生まれ、三十歳前後に地区の運動会を手伝ったことをきっかけに、スポレク部員、体育指導員となり、その後は、よくある話ではありますが、スポーツ活動だけでなく、幅広く公民館活動に関わるようになりました。

そして、平成二十五年度から館長補佐を一期務め、二十七年度から館長に就任し、今年度で四年目になります。スポーツが趣味で、学生時代はハンドボール、社会人になってからは、硬式テニスをしていました。また、昔から子どもたちとの交流を大切にしてきており、ソフトボールのお世話をしていたこともありますし、現在は、バレーボールの指導をしています。このようなことから、八坂小学校の子どもたちとは、長年の縁もあり、館長になった今でも「館長さん」と呼ばれずに「小川さん」と呼ばれています。

★八坂地区について教えて下さい。

八坂地区は松山市の中心部にあり、石手川の北側に位置し、東西に長く南北に短い地域で、西側には繁華街、東側は住宅地となっています。人口は五千二百三十二人、世帯数三千二百十七世帯（平成三十年十二月一日現在）で、地区内の八坂小学校の児童数は百四十四名、一学年一クラスです。市内中心部ではありますが、高齢化率も高くなっています。地区内には四つの神社があり、地区の名称の由来は、勝山町一丁目の「八坂神社」からと言われています。それぞれの神社で夏祭りが催され、市内中心部でありながらも住民の気質は古き良き人と人との絆が色濃く残っているところです。

★八坂公民館の特徴的な（主な）事業を紹介して下さい。

代表的なものとして「ホタル育成事業」と「八坂大運動会」があります。まず、**ホタル育成事業**は平成四年から取り組んでいます。これは、八坂小学校南側の石手川土手にある中の川の取水口から約百mにわたる水路が、ホタルの生息条件が整っていたことから、その水路を**「ホタルの里」**として整備し、当初はホタルの幼虫を放流し育てていました。また、この活動は、年間を通じて行っており、毎年五月末に開催するホタル鑑賞会のために、八坂小学校に設置している飼育小屋**「ホタルの家」**でのホタルの育成や、年三回の「ホタルの里」の清掃活動も行っています。年々、自生のホタルも増えており、地域の環境保全意識の向上にも役立つ活動となっています。今年は例年以上にホタルが舞い、ピーク時には二百匹以上のホタルが舞い、ホタル鑑賞会

「ホタルの里」全景

も地域の皆さんに大いに楽しんでもらうことができました。

次に、**八坂大運動会**ですが、地区内の住民や児童数の減少に伴い、公民館と小学校が合同で開催している運動会で、今年で十八回目を迎えました。その始まりは小学校からの要請でしたが、地域住民、児童、先生方が協力して地域一体で開催することで、大人も子どもも楽しみにしている地区の大きな行事となりました。

また、コミュニティづくり、住民交流を深めてもらおうと春のバザー、七夕まつり、あるこう会、もちつきなど季節にあわせた事業も行っています。これらの事業を実施するにおいても、地区内の高齢化が進む中、やはりPTAと協力体制は不可欠です。たとえば、今年、三世代交流「公民館に泊まろう」という事業では、過去に学校内でしたことのあった「きもだめし」を公民館の中でやってみようということになったり、授業とは違う「プール遊び」など、PTAの若い感覚とアイディアと協力のおかげで、大好評の催しになりました。

授業とは違う「プール遊び」

★これからの課題、抱負についてお願いします。

少子高齢化や後継者不足がこれからの課題だと考えています。地区内にはマンションも多く、地域とは関わりをもちたくない人の割合も増えており、その結果、一人が二役三役を担っていることも多々あります。PTAにも協力してもらって、少しでも多くの人に公民館活動へ参加してもらいたいと思っています。

また、地域課題の発掘や解決に向けての学習会や、地域の歴史や文化を題材にした学習活動にも力を入れながら、地域の学習拠点として、楽しさも学びも交流もすべてを兼ね備えた公民館として、地域の皆さまに親しまれるよう努めていきたいと思っております。

宇和島市立天神公民館 西田 稔館長さんにご質問

宇和島市教育委員会生涯学習課
課長補佐 内升幸記

宇和島市立天神公民館
西田 稔 館長

質問一 天神校区はどんなところですか。またどんな活動を行っていますか。

宇和島市は、愛媛県西南部に位置しており平成一七年八月に宇和島市・吉田町・三間町・津島町が合併して新しい宇和島市が誕生しました。

私たちの天神校区は、商店街やJR宇和島駅がある、比較的市内中心部に位置し、宇和島城や市役所にも近く、また、住みやすく、人口約四千四百人・約二千三百七十世帯の校区ですが、市同様に少子高齢化や人口の減少が進んでいます。校区内には、三十町内自治会組織があり、地域の安心、安全で住みよい町づくりに、地域が一丸となって取り組んでいます。当市には、公民館が三十一館あり、天神公民館は小学校と保育園が隣接した、市街地が眺望できる海抜三〇・七mの小高い場所にあります。

公民館活動につきましては、事業を四項目に分けると「住みよい地域づくりを目指す事業」・「青少年健全育成の事業」・「社会体育、文化活動の事業」・「高齢者教育の事業」がありますが、特に青少年健全育成においては、

地域が一体となって子供たちを見守っています。また、七草がゆや、どんど焼きは地域の伝統行事であり、住民全体で継承していくべき行事であります。地域のニーズを把握しながら、行事を盛り上げ、継続していくためにも、リーダー養成は、公民館に求められる重要な課題の一つだと認識しております。

質問二　平成三十年度市公連会長に就任＆県公連副会長に就任されて（意気込み・思い）

私は、天神公民館長に就任して三期六年が過ぎ四期目に入りました。今年度は宇和島市公連の会長と、前任者の引継ぎで愛媛県公連の副会長をも引き受けることとなりました。公民館では、これまでに多様な事業を実施してきましたが、地域での人間関係が希薄化していると言われる中、多様化する住民ニーズに対応できるよう、地域、学校、各団体、公民館等が連携を取りながら、地域課題の解消や、生涯学習の推進に繋がればと思っています。

また、地域の方々が気軽に公民館に足を運び、自身の思いや、相手の考えに耳を傾け、そうした学びや共感の中で育まれる、コミュニティーの形成に繋がるような、公民館活動が出来ればと思いを馳せているところです。

質問三　豪雨災害を受けて思うこと（避難所運営や現場対応（主事）に対して思うこと）

七月の集中豪雨において、私たち天神公民館も避難所を開設しました。当地域においては家屋等の被災はありませんでしたが、「避難勧告を受け不安です」と、住民の方々が三十名程避難してきました。主事は避難者名簿の作成や避難者の声を聞き、災害対策本部への連絡対応をしました。

また、各公民館とのグループラインのやりとりをして情報収集をしています。地元消防団の見回りにも避難情報を報告しています。

なお、吉田町におきましては、当地域とは違い、床下、床上浸水、家屋の倒壊等と甚大な被害を受けました。二〇一八年月刊公民館十一月号に、公民館主事が「平成三十年七月豪雨災害を振り返って」を掲載していますので、ご一読下さい。

今回身近に起きた豪雨災害における避難所対応について、公民館として何をすべきであったのか。何が出来て、何が出来なかったのか等、この経験と反省を生かした、地域の防災拠点施設の位置付けである、公民館における「備え」の対応が重要であると認識させられました。

最後になりますが、公民館は、地域住民が楽しく「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを通じて、人づくり、地域づくりに貢献しなければなりません。

そして、重ねてではありますが、安全安心なまちづくりにも寄与する必要があると考えます。これからの地域防災について、地域全体の課題として是非取り組んでまいりたいと思います。

元気な主事さん

金生公民館の紹介

四国中央市金生公民館
主事　白川文統

一　金生町の歴史

金生町は、四国中央市の香川県境に位置し、人口は九〇五三人（平成三十年十一月末現在）と市内人口のおよそ十分の一以上も占める、市内で二番目に人口が多い町です。町の中央を流れる金生川は、毎夏に蛍が飛び交うほどの清流であることから、手漉き和紙産業が発祥した町でもあります。また、平家落人伝説が残る切山地区では、愛媛県最古の民家とされ国の重要文化財に指定されている真鍋家住宅があります。平清房（平清盛八男）を始祖とする家系が居住していたとされており、桃山時代後期に建築された寄棟造りの木造茅葺住宅を見ると、切山の長い歴史を感じさせられます。

二　特色ある公民館事業

金生公民館の特色ある事業の一つに、次代を担う子どもたちの防災意識の定着を目的とした、「少年消防クラブ」があります。このクラブは、金生町内の小学五年生児童で結成し、毎年七月頃に市消防本部救助隊指導のもと、水難事故が発生した場合を想定した着衣泳法等の体験学習を行っています。このような事業は単体の機関で実施するのは困難であるため、公民館がコーディネーターとなり学校及び消防本部と協力して展開しています。子どもたちには、水着着用時と衣服着用時それぞれの状態で水中での動作の違いを体感してもらい、水難事故の際にどのように対処すべきか、左記のような知識を学習します。

・溺れそうになっても慌てず、上向きで浮くことを第一に考える。
・多くの場合、無理に泳ごうとしたり、衣服や靴を脱ごうとしたりしてはいけない。
・誰かが溺れている場合、決して自分で水中に入り助けようとしてはいけない。

こういった知識は、日頃から現場の最前線にいる救助隊員から直接教わるからこそ緊張感をもって聴くことができ、さらに自ら体験することでより定着すると考えられます。

過去にはこの事業の一環として、消防防災センター（市の防災拠点施設）へ見学に行き、人工呼吸・心肺蘇生法等の人命救助の方法や、消火器の使用方法の学習、起震装置を用いた大型地震の体験等を行ったこともあります。今後もこのクラブ活動を通じて、災害予防についての知識を持ち、万が一のときには危機から身を守ることのできる青少年を育成するとともに、将来的には地域課題でもある「災害に強いまちづくり」を担う一員として活躍してもらえるよう、充実したものにしていきたいです。

三　公民館主事の役割

社会教育の観点から考えられる公民館主事の役割の一つとして、地域住民の自主性を醸成させることが挙げられます。以前より、公民館でお年寄りの方でも手軽に継続して行うことのできるエクササイズを検討していたと

ころ、スポーツ推進委員の方から、ノルディックウォーキングという全身運動を考案していただきました。なかなか馴染みのないスポーツですが、実際に参加された方の満足度は非常に高く、「近所のお年寄りの方とも是非一緒にやりたい。今後は公民館の新しいサークルとして活動したい。」といった声も聞こえてきました。今回の参加者は十人余りでしたが、これをきっかけにご近所同士が誘い合わせてサークル活動として実施されれば、将来的に地域住民の健康増進に繋がるのではないかと思います。

このように、住民自身が地域のために何か活動してみたいと思っていただけるようなきっかけの場を提供していくことが、公民館の役割だと思います。今後も各種団体の方をはじめとする地域の皆さんと協力しながら、地域の自主性を促すイベントを積極的に考案していきたいです。

四　人権教育の拠点として

金生公民館では年に二回、公民館を利用されている方を対象に、人権・同和教育学習会を開催しています。結婚や性、高齢者に関する人権問題等、人権・同和問題に関する正しい知識や感性を身につけ、地域の人権意識を高めるためにこの学習会を行っています。人権や差別と言われても、目に見えるものではないため、実際に被害を受けていなければこの問題を理解することは難しいものです。しかし、決して他人事ではなく、一人一人が自分自身の意識の問題だということをしっかりと認識しなければなりません。差別的表現を目にしたときに、おかしいと思える感性を育むことや、常に相手の立場に立って物事を考えられる想像力を培うことが、差別解消の一歩に繋がるのではないかと思います。誰もがいきいきと幸せに暮らすことができる町づくりのために、人権教育を進める地域の拠点として、今後もこのような学習会を継続的に行っていきたいと思います。

五　公民館主事を振り返って

私も公民館に配属され早三年が過ぎようとしています。配属されたばかりの頃は、分からないことばかりで戸惑いの連続でした。配属されるまで、地域にこれだけ多くの組織・団体があることすらも知らない新米主事でしたが、地域の皆さんは温かく迎え入れてくださいました。公民館は、市役所の中でも特に住民の方と密接に関わり合いがある部署で、誰のために働いているのかをより実感できる場所でもありました。今後部署を異動しても、公民館で勤務した経験を活かし、市民の方のために尽力していきたいです。

私の元気の源は…

八幡浜市立川上地区公民館
主事　楠　理　恵

「あんたの笑顔を見るのがいつも楽しみなんよ。元気をもらってありがとう」
「仕事大変だろうけど、休み休みしなはいよ～」

公民館の事務所の前では、このような会話が飛び交うことがあります。特に、Nさんは団体で利用されて帰る時には、必ず私の顔を見てこんなふうに優しく声をかけてくれます。そのたびに、私も「この仕事をやって良かった」と喜びを感じる瞬間に出会います。

川上地区は、八幡浜市の南西部に位置しており、周囲をぐるりとみかん山に囲まれ、川上湾という美しい海に面した、豊かな自然環境に恵まれた地域にあります。

私は、市内からお嫁に来てもう何年も経ちますが、この川上地区が大好きです。ここで誇れることが三つあります。まず、何といっても美味しいマルカみかん、二つ目は養殖の鯛、三つ目は四月の第三週に行われる川名津柱松神事です。その春祭りでは、川名津神楽という県の無形文化財でもある伝統的な神楽が奉納されます。これを地元川上小学校の六年生が毎年題目を一つ選んで練習し、皆の前で何回か披露するということになっています。この川上小学校も少子化の影響で現在四十名をきってしまいました。しかし、この

伝統を守り続けようと、子どもたちは一生懸命舞を覚えています。私の息子三人も全員この子ども神楽を披露しましたが、練習本番共にとても感動したことを今でも忘れられません。これから先、この川上小学校がもし合併されようと、この子ども神楽だけはずっと継承していってほしいと願っています。

さて、話は変わりますが、川上公民館は今年度優良公民館として文部科学省大臣表彰をいただきました。公民館が建設されてから三十年以上たちますが、この地域に愛される、なくてはならない大切な存在になっていると思います。

今から六年前、「楠さん、公民館主事をやってくれんやろか?」当時の館長さんと区長さん方がお願いに来られた時は、「そんな難しくて責任のある仕事を私に出来るはずがないので、お断りします。」と一旦お断りしました。そして、「あんたなら出来るけん。」と背中を押していただき、かなり悩みましたが、不安な気持ちを掻き消して自信はないけれども努力してみようと決心しました。あれから、前の主事さんからバトンタッチされて一年目、二年目とここまでやってこれたのは、公民館職員、運営審議委員、他関係団体の方を含む町民の皆さんの協力のおかげだと感謝しています。

早いもので今年で七年目になりますが、主事の仕事は一年を通して途切れることはなく、とても多忙です。しかし、一つ一つの行事をただこなしていくのではなく、公民館に関係する皆さんの意見を絶えず聞き、悪いところは直して良いところは取り入れながら、常に進化し続ける公民館の形であり続けたいと思っています。

そのためには、私自身も研修にも積極的に参加したり、いろんな会合に足を運んで人脈を広げ、よりよい公民館になれるよう精進していきたいと思っています。

川上公民館に来たら、誰もが「笑顔になる」「元気になる」と言われ続けることが、私の一番の目標であり、生きがいです。

まだ川上地区を知らない、そこのあなた！ぜひ一度こちらに来られる際は、川上公民館へも立ち寄ってみて下さい。職員一同、お待ちしています。

わんぱく移動教室2018

郡市公連だより

ふるさとへの思いを育む公民館活動

砥部町ひろた交流センター
専門員　野澤勇一

一　はじめに

広田地域は、砥部町の南側に位置し、豊かな森林資源や自然景観が美しい山間地域で、人口は七百七人・三百九十七世帯（平成三十年三月末現在）です。また自然条件を活かした高原野菜や自然薯の栽培が盛んです。

ひろた交流センターは、広田地域の地区公民館として地域の特性を生かした様々な事業を実施しており、コミュニティーの活動拠点として重要な役割を担っております。その中から保育園児と小中学生を対象に、広田地域の人材や自然環境を活用した総合的な学習を行い、郷土愛を育むことを目的に各種教室を開催している「サタデースマイル.inひろた」事業（各回約三十人参加）について紹介させていただきます。

二　主な活動内容

①木育教室

町内在住で木育インストラクターの資格を持つ講師を迎え、地元の木材を活用した木育教室を開催しました。チーム対抗で白木のピラミッドを作り、高さを競い合うワーク

ショップや丸太をのこぎりで切る体験、木のおもちゃ作り、カホンという木製の打楽器を演奏するなど約二時間のプログラムでした。参加者の中には「将来地元に大きな木の家を建てたい。」と目を輝かせている子どももいました。

②科学体験教室

町内にある愛媛県立医療技術大学の教授が講師となり、年二回、日常生活の中にある科学的現象に遊びを取り入れて行う科学体験教室を開催しました。一回目が小石の宝石やスーパーボールを作る体験、二回目は家の中でも遊べる凧作りを体験しました。大学教授の専門的な知識は、子どもたちにとって魅力的で、科学への興味をかき立てるものでした。身の周りにある科学の不思議を楽しく学ぶことができ、子ども同士の交流も深まりました。

③スポーツ活動

インディアカ教室とバドミントン教室を開催しました。インディアカは平成二十九年度愛媛国体のデモンストレーションスポーツ競技として砥部町で実施した種目です。また、バドミントンは砥部町を国体会場として実施された種目です。国体のレガシー（遺産）を継承し、スポーツ活動に一層親しむ子どもたちを育てるとともに、地域づくりにも繋がるものと思います。

④料理教室

地元で採れる新鮮な野菜を使って手軽にできる昼食作りを親子で参加し、体験しました。指導は、地域の生活研究グループにお願いし、料理をするだけでなく、地域の人との触れ合いの場となりました。メニューは、しいたけや自然薯、キャベツ、ゆずなどの地元農産物をトッピングしたピザと柿などの果物をふんだんに使用したクリスマスケーキでした。調理実習を通して親子の触れ合いや協力して作業をする連帯感も育まれました。また、広田地域の特産物を知り、味わうきっかけにもなりました。

三　おわりに

進学や就職で広田地域を離れる子どもが多く、高齢化や過疎化の進展が課題となっています。「将来ふるさとに戻って暮らしたい。」「地域を再び活性化したい。」と思う大人になって欲しいと願い、郷土愛を育む「サタデースマイル in ひろた」事業に力を入れています。今後とも広田地域の人材や自然環境を生かした公民館活動に取り組むとともに、子どもや大人、高齢者といった幅広い年齢層が交流することで、地域の絆を大切にした特色ある公民館活動を目指していきたいと思います。

よりよい公民館活動を目指して

大洲市中央公民館
主事　高橋奈緒

一　はじめに

大洲市の公民館は、中央公民館一館、地区公民館二十三館、分館十九館の合計四十三館が条例により設置されています。公民館長、分館長、公民館主事、嘱託職員の皆さんが、地域の特色ある公民館活動をそれぞれ展開し、日々の公民館運営に携わっていただいております。

本市の公民館はもともと小学校単位で設置されていましたが、少子化に伴う統廃合によって地区内に小学校がない公民館が増えてきました。地区の高齢化も進み、地域運営や防災など各地区が多くの課題を抱えています。様々な課題解決に向けて、住民に学びと交流の場を提供し、自治会等と連携し地域ぐるみの活動を推進するため、今後も公民館はなくてはならない生涯学習の拠点であると考えています。

そのため、中央公民館（生涯学習課内）では、それぞれの地区で奮闘する公民館職員の皆さんが、情報を共有し互いに切磋琢磨することで、よりよい公民館活動につなげてもらうよう、毎月の定例公民館主事会と、年数回の研修会を開催しています。平成二十九年度の取組みから二つご紹介します。

二　公民館長・分館長・主事合同研修会

公民館同士の情報共有及び交流の促進によって、公民館活動の充実を図ることを目的として、平成二十六年度から開催しています。当初は公民館長・主事のみの合同研修会でしたが、平成二十八年度から、分館長にも参加いただいております。毎年二館ずつ、地区公民館の活動事例を報告していただき、質疑応答を行います。同じ市内でも知らなかった地域行事や活動があったり、各地区で共通して行っている敬老会事業等についてもそれぞれ工夫した点があったり、有意義な意見交換ができていると思います。さらに、南予教育事務所社会教育課や愛媛県教育委員会社会教育課などから社会教育主事を講師としてお招きし、公民館活動のヒントとなるような講義をしていただく機会を設けています。

合同研修会の様子

普段は自分たちの地域についてのみ考えることが多いので、他の地域の経験や意見を聞くことがよい刺激になっています。

三　公民館嘱託職員研修

館長、公民館主事と比べて研修等で自館を離れる機会が少ない嘱託職員の皆さんにも、公民館同士の交流を深め、日々の活動の糧になるよう年に一度の研修を開催しています。

平成二十九年度は、国立大洲青少年交流の家にて、メンタルヘルス研修と学級講座に活用できるニュースポーツの研修を行いました。嘱託職員同士は普段顔を合わせることが少ないのですが、一緒に体を動かしてスポーツをすることで、研修の終わりにはとても打ち解けた雰囲気になりました。公民館業務を行っていく中で、気軽に公民館同士で情報交換ができる関係性を作っていっていただきたいので、今後も堅くなりすぎないような研修内容を検討していきたいと思います。

嘱託職員研修の様子

4　おわりに

時代の変化とともに公民館に求められる役割が変化し、業務量も拡大していますが、社会教育、地域づくりの拠点として、地域に愛される公民館を目指し、今後も職員一丸となって頑張っていきたいと思います。

第三十回　全国公民館セミナーレポート

新居浜市立新居浜公民館　主事　仲村康子

第三十回全国公民館セミナーが「新しい公民館像をさぐる―人が集まる　これからの公民館のつくり方―」をテーマに開催され、参加させていただきました。

「人が自然に集まるような公民館にするためには、どのような仕組みづくりをしたらよいか」を考えさせられたセミナーでした。今年度は株式会社オスカープロモーションさんの協賛・協力があり、全体ＭＣをお笑い芸人バーゲンセールが務めて下さいました。月刊公民館で紹介されている全国津々浦々の公民館に取材に行かれ、公民館の役割などをよく勉強されていて、感心しました。プロだからということもありますが、声が大きくて喋りの間が素晴らしく、とても心地よいＭＣでした。彼女たちからＭＣとしての意気込みを学べたと思います。

初日の前半は「トークセッション」東京大学大学院教育学研究科教授牧野篤先生をコーディネーターとして迎え、コミュニティデザイナーの出野紀子さんは「もっと人が集まる公民館を！」というテーマで、那覇市繁多川公民館館長南新之介さんは「公民館の可能性とグローバル化」というテーマで、事例発表で活動内容を紹介し、文部科学省総合教育政策局地域学習推進課長中野里美さんは「これからの公民館のありかた」というテーマで、人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について、中央教育審議会答申の内容について説明して下さいました。

出野さんは、二〇〇一年にロンドンへ渡り、テレビ番組制作に従事し、二〇一一年にｓｔｕｄｉｏ―Ｌへ参画後は、島根県海士町の自主運営テレビ局で住民による番組作りをサポート。広島県と愛媛県が共催した「瀬戸内しまのわ２０１４」では、住民による観光と地域振興を支援し、秋田では、高齢者の実態を調査し、その内容を「２２４０歳スタイル」で紹介する等、健康長寿と地域福祉の充実を目指すプロジェクトに携わられました。二〇一七年には、Ｃｏ―Ｍｉｎｋａｎ普及実行委員会を三名で立ち上げ、全国に「つどう・まなぶ・むすぶ」ことができる私設公民館の普及活動をされています。公民館らしからぬ公民館、一風変わった公民館の在り方に刺激を受けました。公民館は課題解決型ではなく可能性志向型で進めること、やってみて発見することの必要性を学びました。

南さんは、平成十九年ＮＰＯ法人なはまちづくりネットに加入、平成二十六年三月にはＮＰＯ法人一万人井戸端会議を設立され、四月に那覇市繁多川公民館の一部業務受託団体となり、平成二十七年四月からは指定管理者に、現在は館長として新しい公民館活動を展開されています。特に注目する点として、〝アラブの春〟というエジプトとネット中継での合同講座や現地訪問を行い、日本の公民館をつくる活動を紹介されました。公民館の在り方にはいろいろな形があるということを知り、只々驚くばかりでした。

お二人の発表を聞いて、若者を公民館へ誘う技が素晴らしく、地域住民が自ら参画し、地域課題を解決させようとする仕掛人として学ぶ点が多々ありました。事業的には、現状取り組めないこともありますが、ヒントを沢山得られたと思います。

中野さんは「これからの公民館のありかた」というテーマで、今後の地域における社会教育の意義と果たすべき役割」、今後の社会教育施設としての公民館の役割を、現在公民館が抱えている問題点を指摘されながら説明され、今後の公民館活動の重要性を痛感しました。

初日の後半と二日目の午前中は牧野先生による「公民館を地域づくりの基盤に」と題した集中講義が行われました。人生百年時代における社会基盤としての公民館と社会教育活動の重要性、地域学校協働活動においては家庭で教育的なことを任せるのが難しくなってきている時代において、「コミュニティー・スクール」・「アクティブ・ラーニング」・「チーム学校」・「地域学校協働本部」が必要になってくること、時代の流れで社会教育が変化していくことについて事例をあげて分かりやすく話されました。「はざま」を「間（あいだ）」にするために公民館を社会の中に埋め込むこと、一般行政を社会教育的に使いこなすこと、サービスの提供ではなく住民が主体的にやれることを支えること、「地域づくりの基盤としての公民館」を目指すことの必要性を投げかけられました。地域の特性を生かし、公民館の在り方を考えていかなければならないと強く感じられた講義でした。

その後、「人があつまりたくなる　公民館運営のしかた」というテーマで、ＮＰＯ法人きらりよしじまネットワーク事務局長の髙橋由和さんをコーディネーターに迎え、自身の取組みを伺った後、グループワークを行い、長丁場の研修となりました。

高橋さんは地域活動支援アドバイザーとして、今までの地域づくりのシステムを根本から見直し、住民ワークショップを取り入れた地域の合意形成を山形県川西町で推進し、全世帯加入のＮＰＯ法人として持続可能な新しいまちづくりに挑戦されています。コミュニティ支援のために、ネットワーク型中間支援組織「おきたまネットワークサポートセンター」を設立し、事務局長として地域課題を複数力で解決するシステムを構築されました。二〇一七～二〇一八年には、総務省の「過疎問題懇談会委員」等、地域問題に関する委員を歴任されている先駆者的な存在です。

ＮＰＯ法人きらりよしじまの設立経緯と地域経営のイノベーションについては、形骸化するコミュニティの課題や組織力の衰弱化を改革してきたことや、生活に根差した実践として、地域の現実を把握し、課題解決はＰＤＣＡを回し生活に根ざした事業を組み立て、地域住民を運営に巻き込んでいく方法について説明されました。また、求められる地域づくりに必要な仕組みとして、地域住民が地域づくりの必要性を理解してその一役を担い、自己実現と地域の課題解決に取り組むために、「なぜ行うか」の合意形成と、担い手の育成、資金力、外とつながるネットワークシステムの在り方や、様々な壁にぶつかる地域づくりは住民だけでは解決できないため、協働の支援体制として、行政が地域づくりの支援を行うことや中間支援の手立てを持つことなど、取り組まれてきたことを熱く語られました。ご自分の経験をもとに活動をされてきただけのこともあり、ご苦労もかなりあったとは思いますが、「協働の主導と主体」についての意気込みを感じました。年間を通じて、公民館事業を実施していますが、ＰＤＣＡサークルができているのかと自分に問いかけると…できていない部分があることに気が付きました。チェックシートを作成する、ワークシートをうまく活用するなど、ヒントを沢山得られたと思います。「これからの二十年を考える」と、人口減少・超高齢化社会・自治体財源減少と問題が山積みです。だからこそ、地域づくりとしての公民館の役割が大きくなってくるのだとも痛感しました。

高橋さんの講義を受けた後、六人ずつ二十グループに分かれてグループワークショップを実施しました。まずはグループメンバーの自己紹介、公の分野である名前と仕事、私の分野である特技とここ一週間で感動したことについて互いに話し、これからワークショップを実施するメンバーを確認しました。まず、「事例の４Ｍの解剖シート」を使い（人・モノ・カネ・手法：４Ｍ）グループのメンバーそれぞれが事例について考え意見交換を行いました。

次に「地域の活動人口の拡充と育成（関心と関与の見える化ワークシート）」を使って、縦軸が関心、横軸が関与と深化するごとに地域活動が活発になることを考え、グループのメンバーで情報を共有していきました。メンバー全員の悩みはほぼ同じで、若い人たちがなかなか公民館に来てくれないことや、事業のマンネリ化に頭を抱えていることを知り、このワークシートを使い、グループで考えたことが、すぐにでも役立ちそうな気がしています。今までに使ったことのない優れたワークシートで、感心してしまいました。

三日目は、「優良公民館に学ぶ！「人が集まる」公民館運営」というテーマのもと、第六十七回優良公民館最優秀館の福井市社北公民館田中主事、第六十八回優良公民館最優秀館の大竹市玖波公民館河内主事、第七十回優良公民館最優秀館の沖縄市若狭公民館宮城主事の三名から事例発表がありました。

一番手は田中主事で、「社北公民館発！ぐるぐる広がれまちづくり環・和・輪」のテーマのもと、教育事業、チャオカード作戦＆取組み、まちづくり、ＰＤＣＡサイクルの利用についての報告がありました。地域の声を反映しながら事業の見直しを継続することの大切さ、いろんな人と協力すれば楽しく地域を変えていける、楽しく参加させてもらえることが職員の充実感・達成感につながるとまとめられました。きちんとＰＤＣＡサイクルを利用され、事業を進められていること、若者の地域参画、中学生の行事参画等、今後の公民館運営に参考にしたい点がありました。特にチャオカード作戦の取組みには興味がわき、実際に取組みをスタートさせたいと考えています。

二番手は河内主事で、「～ひとが変わり・まちが変わる～「学びのカフェ」物語」を第一章から第三章へと発展していった取組みの報告がありました。第一章「学びのカフェ」では、当時の公民館の現状（固定客、貸館状態、職員一人）の脱皮として、おしゃれな空間を作ることで公民館をイメージチェンジしたこと、それにより新規来館者が増えていったこと、住民のつながりの「土壌」ができたことといった成果を報告されました。しかし、この時点ではＰＤＣＡサイクルの機能は完全ではなかったようです。第二章「地域ジン学びのカフェ」では、知性と感性を共有し、おしゃれ感を出すため、Ｔシャツ・うちわ・テーマソングのＣＤを作成し、仲間意識を高めた結果、ネットワークが広がったこと、地域課題への関心が高まっていったこと、ＰＤＣＡがまわり始めたとい

う成果があったことを報告されました。第三章「地域ジンまちカフェプロジェクト」では、「地域ジン中学生」が誕生し、自主的にプロジェクトに名乗り出るようになり、地域連携「玖波スクラム」が構築されてきて、まちの良さを再発見（歴史・文化・人材）し、学校と地域のつながりが、多世代交流へつながるという形で成果があったと報告されました。取り組まれた「学びのカフェ」の波及として「ひとが変わり、まちが変わった」という実感があり、公民館が核となり、地域の新しい担い手が育つ土壌ができ、ふるさとを愛する心が芽生え、まちが輝いてきたとのことです。玖波公民館の取組みからも、PDCAサークルの必要性、中学生を巻き込んで事業展開することの重要性を学ぶことができました。

三番手は宮城主事で、「人が集まる公民館運営～わかさ式六つの極意～」をテーマとした「リッカ！ヤールーキャラバン！」「うみそら上映会」「朝食会」「防災の取組み」「公民館合宿」「百人でだるまさんがころんだ」の活動内容について説明がありました。若者参画のため、青年のための講座や、交流事業を実施する中で若者の声を（例えば、利用しづらい、興味が持てない、公民館の存在を意識したことがない）吸い上げ、公民館自身が変わらなくてはと、「公民館が変わる」ことを内外に宣言し、若者からヒヤリングし、公民館合宿では寝食を共にしながら、面白いイベント上映、音楽ライブ、イベントづくりのワークショップ等を体験してもらうことにより、少しずつ公民館とのかかわりを持ってもらうことに熱意を注がれたとのことです。取組みのひとつの「朝食会」は、公民館合宿で出たアイディアを実現させたもので、毎月一回、各自おかず一品を持ち寄るが、参加してもしなくてもよく、場所を確保するだけ。モットーは「がんばらない」で続けられてきて、開始時独身だった人が今は子連れで参加し、現在では、子育てに関する情報交換なども行われているとの報告でした。最後に、人が集まる公民館運営の極意として、「不完全だからこそ多くのひとがかかわる」、「カタチを整えるよりも魅力をつくることに注力する」、「企画者自身が楽しむ・楽しく見せる」、「『がんばらない』というスタンス、『ハレ』の場のあとの『ケ』（日常）を大切に、情報発信することで多くの人に伝える」ことをあげられました。宮城さんの報告から、若者を引き込む方法やリサーチの大切さを感じ、取り組めるものを探っていこうと考えています。

三日目の実践研修のコーディネーターについてもバーゲンセールが務めて下さり、楽しい雰囲気の中、聞かせて戴けました。発表された方皆さん共通していたことは来てもらうことが第一歩であり、敷居を低くすること、「集まらなくてもいいや」というくらいの気持ちで、まずはやってみること、地域の方の話を聞くこと、何かできることを探ること、日々の生活にヒントがあること、小さいことから積み重ねていくこと、何よりも人とのつながりを楽しむことで、それらが改めて大切であると痛感しました。

この三日間、講師の方々から内容の濃いお話を聞くことができ、大変勉強になりました。この研修で得た情報や人脈を、今後の公民館活動に活かしていきたいと思っています。今は研修を受けてきたばかりで学んだ内容が頭の中で一杯になっているため、一度頭の中を整理して、何を一番にしなければならないかを考え、地域の方を巻き込みながら、共に公民館をつくっていきたいと思っています。

このような機会を下さったことに心から感謝しています。ありがとうございました。

【これからの公民館の役割と課題とは】

平成三十年度　愛媛県公民館研究大会【記録】

会場　久万高原町産業文化会館　ほか

平成三十年度愛媛県公民館研究大会（主催：愛媛県公民館連合会・愛媛県教育委員会）を、「これからの公民館の役割と課題とは」を大会主題として、十月二十六日（金）に久万高原町産業文化会館ほかを会場に開催しました。

開会式には、中村時広知事（代理：三好伊佐夫愛媛県教育委員会教育長）、鈴木俊広愛媛県議会議長、河野忠康久万高原町長、土居英雄愛媛新聞代表取締役社長（代理：柳田幸男専務取締役）ほか、多数のご来賓の方々のご臨席を賜りました。

大会の開会行事では、永原修愛媛県公民館連合会長の開会あいさつ、来賓祝辞に続いて、各部門の表彰を行いました。

県教育長と県公連会長の連名表彰では、優良公民館八館及び優良公民館職員十九名、県公連会長表彰では、優良公民館四館、優良公民館職員六十四名、優良自治公民館八館、優良団体・グループ七団体、優良グループリーダー一名、優良協力者三名、県公連会長感謝状では、永年勤続公民館運営審議会委員二十一名、更に愛媛新聞社長と県公連会長の連名表彰では、館報コンクール入選十四館にそれぞれ表彰状・感謝状が授与・贈呈されました。

開会行事に続き、全体会では、「未来志向の地域づくりと公民館の役割」をテーマにインタビュー・ダイアログを行いました。インタビュアーを愛媛県公民館連合会専門委員会の若松進一委員が務め、登壇者として、大洲市豊茂自治会藤岡章男事務局長、新居浜市立金栄公民館國光梢主事補、宇和島市立吉田中学校宝本将教諭の三氏にご登壇いただきました。若松氏の進行のもと、登壇者から、各々の活動事例、討議してほしいキーワードの提示や参加者への提案がなされ、有意義な意見交換が行われました。

午後からは分科会が、分科会A「高齢者が活躍する地域づくり」分科会B「安心安全な地域づくり」分科会C「異世代交流を促進するための住民参画のあり方」分科会D「学校との連携・協働」分科会E「伝統・文化の継承」の五つをテーマとして各会場で開催され、各分科会とも熱心に研究協議が行われました。

以下、全体会及び分科会について、当日の記録に基づき、その要旨を掲載します。

【全体会（インタビュー・ダイアログ）】

平成三十年度愛媛県公民館研究大会では、新しい試み＝「愛媛方式」としてインタビュー・ダイアログを実施しました。県内から地域づくりを実践している三名の方々に登壇していただき、インタビュアーの軽妙な進行のもと、各々の活動の特長や成果、参加者への提案等について議論し、地域づくりと公民館の役割について、多くの気づきや学びのある全体会になりました。

テーマ　「未来志向の地域づくりと公民館の役割」

インタビュアー　愛媛県公民館連合会専門委員　若松　進一

登壇者　大洲市豊茂自治会事務局長　藤岡　章男

新居浜市立金栄公民館主事補　國光　梢

宇和島市立吉田中学校教諭　宝本　将

【インタビュー・ダイアログ登壇者の主な発表内容】

ミニスーパー豊茂について（大洲市豊茂自治会事務局長　藤岡　章男）

大洲市長浜町の山間部に位置する豊茂地区は、人口三百八十五人、高齢化率五十三％の少子高齢化が進んでいる地区である。豊茂自治会

では高齢者・買い物弱者支援の事業として、「ミニスーパー豊茂」を運営している。

平成二十二年に豊茂地区で唯一の商店が撤退する際、「住民の力で店を守る」という考えのもと、店舗の存続について自治会で検討を重ねた。そして、商店の存続を望む多くの住民の賛同により、平成二十三年四月に自治会が運営するミニスーパーをオープンした。その後、来店が困難な高齢者のため、大洲市の補助を受けて配達用の車両を購入したり、平成二十五年度以降は、移動販売や惣菜・弁当の生産・販売も行うようになったりして現在に至る。

今年度四月には、存続について改めて役員が話し合い、「どうしても存続しないといけないのか。」という意見もあったが、「今後さらに増える高齢者のためにもぜひ存続しよう。」という考えでまとまった。このように、ミニスーパーの運営や移動販売について、自治会購買部や役員会、総会などの機会によく話し合っており、運営は厳しいが、現在も地区に買い物の場が存続できていることが成功だと思っている。地域の方々が実際に商品を手に取って選びながら買うことに意義があると考えており、高齢者に「今日の調子はどうですか」と声をかけたり、高齢者から相談を受けたり、集合場所で待ち時間に話が弾んだりなど、移動販売は商品の販売だけでなく、高齢者の見守りやコミュニケーションにも役立っている。

ミニスーパー外観

ミニスーパー店内

豊茂自治会では、自治会の取組を活性化しようと、地域の実態や意見を把握し、地域の皆さんに伝え、一緒に考えてもらうよう努めている。平成二十四年には、地区内の高校生以上全員を対象にアンケート調査を行い、報告書にまとめ、地区住民の状況や住民の考えを認識してもらった。また、平成二十五年には、県の農村整備課に依頼し、地域内の点検をするワークショップを実施し、多くの方に参加してもらった。このような活動を元に、これからの豊茂地区のあり方をみんなと話し合いながら活動に取り組んでいる。みんなで課題を共有し、みんなで解決していく仕組みを大切にしている。

豊茂地区では、地域の活性化と生きがいづくりの一環で、閉校になった小学校の空き教室を利用して、農産物の加工施設と菓子類を作成できる施設をつくり、住民が食品を作って販売できるようにした。また、住民が気軽に利用しやすい部屋として別の空き教室に「憩いの部屋」を作った。さらに、ＰＴＡ会長や地域団体の役員を引き受け、子どもが健全に育ち、誇りを持てるような地域にしていこうと保護者たちに呼びかけ熱心に活動に取り組んだ。多くの人が地域活動に参加するため、公民館の学級やスポーツを通して、集まった人とコミュニケーションを取りながら関心を持ってもらえるようにしたいと思っている。

皆さんへ、「できないことはやらないが成功の秘訣」というキーワードを提案したい。地域を見渡せば、自分たちが取り組めることはいくらでもあるということ。最初から難しいことをやろうと考えないで、自分たちで動けることから始めることが大切だ。また、活動を長く着実に行うためには、地

移動販売

域に深いコミュニケーションが必要であり、コミュニケーションの中心を担ってきた公民館の役割の大きさは計り知れないものがある。公民館主事が、地域住民が喜ぶという思いで計画をつくることはやりがいのあることで、地域の皆さんと苦楽を共にし、地域づくりに取り組むことは、一生の財産にもなることなので、頑張っていただきたい。

金栄手伝い隊について（新居浜市立金栄公民館主事補　國光　梢）

新居浜市立金栄公民館は市の中心部に位置し、地区の人口は約六千人、全校児童四百名ほどの金栄小学校の近くにある。金栄公民館には、校区の中高生がボランティアスタッフとして構成している「金栄手伝い隊」があり、主事補として、手伝い隊のメンバーの招集や活動への協力・指示をしている。

金栄手伝い隊は、メンバーが中学一年～高校三年の生徒たちで、普段、公民館活動にはかかわりの少ない世代を巻き込んだ組織である。結成のきっかけは、中高生の地域での居場所づくりと、地域行事等の運営側スタッフの人材不足解消が目的で発足した。目標は、メンバーが大人になったときに、ふるさとに帰ってきて、地域を支える人材になってほしいと考えている。中高生の募集は、中学校や高校に依頼するのではなく、校区の自治会の協力を得て募集用紙を各世帯に配布している。これは、様々な高校に通っている生徒にも募集用紙が届くというメリットがある。募集や応募の管理は公民館の職員がやっており、公民館主催のイベントに参加する中高生のメンバーが、お客さんにならずに運営に携わっていけることが特長として挙げられる。

手伝い隊の子どもたちは、異年齢の交流ができることをうれしく思っているようで、それぞれに責任のあるポジションを任せた結果、子どもたちは責任感ややりがいを感じ、次も頑張ろうという意欲につながっている。また、揃いのTシャツを着ていることで地域の中での知名度が上がり、地域の防災訓練や運動会の手伝いをしてほしいという依頼にもつながったという実績がある。

これまで、放課後子ども教室の卒業を機に、中高生世代の公民館活動への関わりがなくなっていたが、金栄手伝い隊の結成によって中高生に次の活躍の場を提供できるようになったことも成果である。実際に、昨年度まで子ども教室に参加していた六年生児童たちが、「中学生になったら金栄手伝い隊に入る」と宣言し、実際に三人が応募した。

私たち公民館職員は、手伝い隊の活動が、子どもたちの将来に生きてくる「人材育成」の活動であると意識し、主体的・積極的に動けるよう声かけをし、子どもたちが自発的に活動できることを目指しているが、違う学校から来ていることや、部活動などの学校生活が忙しいという実態もあり、すべてを任せることはできていない。加えて、各々に個性があり、職員が個性を把握したり、職員間で共有したりしていくことも必要であり、難しい面もある。放課後子ども教室でも、受け身な子どもが増えており、活動時には縦割りにして年下のお世話がで

きるよう工夫しており、誰かの役に立つ経験から、手伝い隊の基礎ができ、大人になって還元してもらえたらと考えている。子どもたちに対し地域の人から「来てくれてありがとう」から、「手伝ってくれてありがとう」そして、「気づいてくれてありがとう」と、自発的に行動できたことに感謝してもらえるように育てたい。

皆さんへ、「名前のない家事」というキーワードを提案したい。公民館は、無限の可能性がある職場であり、その仕事は「名前のない家事」と同じだと思っている。私は三人の子どもを持つ母親で、自分の子どもも将来誰かの役に立ってほしい、困っている人に手を差し伸べることのできる大人になってほしいと思っている。同じ気持ちで、放課後子ども教室や金栄手伝い隊の子どもたちとも接している。地域の皆さんと手伝い隊の子どもたちをつなぎ、もっと近づけていくために、両者へ名前のない家事のような細部にわたる準備やこころ配りをすることが公民館の役割だと信じている。また、公民館の職員自身が、地域から社会教育を受け、人生を豊かにすることも役割だと思っている。

吉田中学校コミュニティ・スクールについて

（宇和島市立吉田中学校教諭　宝本　将）

宇和島市立吉田中学校では、三年前に吉田中学校版コミュニティ・スクールを立ち上げた。コミュニティ・スクールとは、地域住民が当事者として学校運営に参画する「学校運営協議会」を設置し、学校と地域の連携・協働体制を組織的・継続的に確立させるもので、地域とともにある学校を作っていこうというもの。コミュニティ・スクールに関する法改正が平成二十九年四月にあり、学校運営協議会の設置が教育委員会の努力義務になり、県内でも次第に設置する学校が増えている状況下である。そのような中、吉田中学校が取り組んできた三年間のコミュニティ・スクールの活動では、様々な主体を巻き込みながら、生徒を育て、地域を育ててきた。また、私自身、吉田町に居住しているので地域の一員でもあり、いろいろな立場から地域や学校、教育の在り方を考えてきた。

写真は、七月豪雨災害時の学校の様子であるが、ご存じのとおり、宇和島市の吉田町では甚大な被害が発生し、校舎一階は五十～六十cmまで水に浸かった。校舎一階部分と体育館はほぼ使用できなくなり、体育館の復旧は二月頃までかかる予定である。図書館の本もほとんど使えなくなった状況下で、現在、教育活動を行っている。

そのような中、吉田中学校では、三年前からコミュニティ・スクールを導入して様々な活動を行ってきている。

昨年度は、吉田中学校創立五十周年であったため、学校運営協議会で何度も協議し、いくつかの創立記念行事を実施した。その一つとして、吉田中学校の卒業生の中で活躍している方々に来ていただき、スペシャルトークショーを実施した。レジェンドと呼ばれる先輩方には、主に中学生に向かってのメッセージや「吉田が好き」「吉田を盛り上げてほしい」といった地域に対する思いを語っていただいた。また、保護者の皆さんと現役中学生が部活動で対決するというイベントを行うなど、学校が媒介となり、地域を巻き込んで実施する行事も行った。

今年度は、豪雨災害もあり、例年通り行事を行うのが困難になっている状況であったが、九月の体育祭の実施の可否を学校運営協議会で協議する中で、生徒も保護者も教職員も地域の方もみんな開催したいと願っていることもあり、九月十一日に体育祭を実施した。運動場にはヘドロの層がたまっていたが、体育祭までに除去し、生徒も二週間で体育祭の準備を仕上げた。全校生徒・教職員で、吉田町の復興を願っ

た揃いのTシャツを着て、生徒も保護者も協力して立派にやり遂げた。このような一つ一つの行事が成功する要因として、地域を巻き込んで教育活動を進めるコミュニティ・スクールの取組が土台にあると思っている。

学校運営協議会を導入した成果として、災害復興の取組も含め、コミュニティ・スクールの取組がうまく機能しているということが挙げられる。愛媛県内には、小学校十七校、中学校九校のコミュニティ・スクールがある。その中で、吉田中学校版コミュニティ・スクールでは、吉田公民館の館長に学校運営協議会の会長を務めていただいている。館長は、様々な方が参加する会をうまくまとめていただいており、話合いも円滑になってきている。

導入後、一番変わったことは、学校運営協議会に参加している皆さんの当事者意識だと思う。学校に頼まれたから支援するという関係性から、計画段階から意見を反映し、自分の立場で何ができるかを協議会で意見していただくようになったことで、行事が充実し、協議会メンバーのやりがいにもつながっている。

社会の変化が激しく、十年前のやり方が通用しない時代だからこそ、学校だけで教育活動を行うのではなく、地域一丸となって教育に取り組むことで大きな成果を挙げられると考えている。今までできなかったことも、地域の人たちの力を借りると案外簡単にできてしまうというような、様々な可能性を持っているのがコミュニティ・スクールだと思う。

皆さんへ、吉田中の生徒が、運動会のスローガンとして考えた「明るい未来を僕らの手で」というキーワードを提案したい。これは、豪雨災害という今までに経験したことのない状況の中、中学生が自分たちの力で地域を明るくしていきたい、という想いを込めた言葉である。体育祭での元気いっぱいの演技、地域に出向いてのボランティア活動、地元の小学生・園児らを招待しての吉中愛顔未来フェスティバルなど、まさに中学生が復興の「当事者」として活動している。その中学生の活動は、地域を元気づける大きな要素になっている。コミュニティ・スクールというしっかりとした組織をもとに、地域づくりの一つの大きな核として学校が存在することが、今後の地域づくりにとっても、未来を担う生徒の成長にとっても、大事なことだと思う。

まとめ「地域が抱える三つのC」

（愛媛県公民館連合会専門委員　若松　進一）

若松進一氏をインタビュアーとし、インタビュー・ダイアログの方式により、登壇者や会場の参加者の方々と議論を共有しました。紙面の都合により、その詳細は割愛させていただきますが、若松進一氏からは、別表に示す内容のご提案がありました。

地域が抱えている3つの“C”

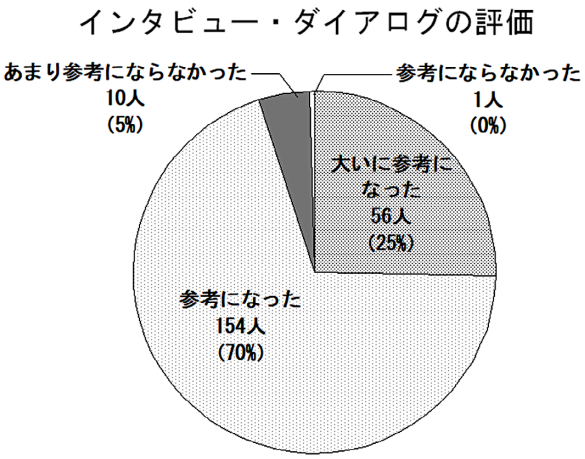
1　コミュニティ（地域社会）community
人口減少　高齢化社会　少子化　地域の自立

2　コミットメント（かかわりあい）commitment
自然災害　安心安全　協働と共生　連携と連帯

3　コミュニケーション（意思疎通）communication
生き方や人生観　生きがい　交流　夢の実現

～未来志向の地域づくりと公民館の役割～

インタビュー・ダイアログのアンケート集計結果（回答者数二百二十五　回収率五十二％）



大いに参考になった	56
参考になった	154
あまり参考にならなかった	10
参考にならなかった	1

インタビュー・ダイアログの感想・意見　自由記述

・高齢化・少子化に伴い、自治会自体危ぶまれてきている状況の中でもやはりコミュニティ活動の大事さを感じられた。
・地域づくりと公民館の役割を改めて再確認することができた。
・事例発表もすばらしかった。キーワードが良かった。若松さんのインタビュアー、まとめ、さすが。
・三つの公民館の事例を聞いて、公民館は地域の人々をつなぐパイプの役割をしていることを改めて学んだ。
・地域づくりの当事者は住民であり、そのことを自覚できる活動が大事であることを改めて認識した。
・登壇者の方がそれぞれの地域で工夫を凝らしたり、取組をなされたりしており、大変興味深かった。特に國光さんの子どもたちに活躍の場を与えて地域に誇りを持ち、さらに未来までも見据えた取組は、高齢・少子化に悩む現在・自分が配属された地域に対しても非常に参考になった。
・それぞれの実情が違う中で工夫し、熱心に活動されている。講演よりもおもしろいと思う。
・こういった形の全体会は初めてだったので、大変良かったと思う。三人それぞれの取組や捉え方があり、大変良かったと思う。
・インタビュー・ダイアログということで、質問ごとにそれぞれのお答えを胸にすとんと落とす時間ができて、より深く理解ができた。継続する事業について参考になった。
・コミュニティ・スクールの話が聞けて、参考になった。
・どの事例も、目先のことだけではなく、長い期間に重きを置いており、物事に対しての考え方、実践するための策などで、新しい視点をもらった気がした。
・地域＝学校の連携は、大規模校でも可能だろうか。校長先生が変われば対応（地域に対する）が変わることってないだろうか。問題点の共有は簡単そうで難しいことだ。

【分科会役員】

〈分科会A〉　テーマ「高齢者が活躍する地域づくり」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　小玉　浩幸
会場責任者　久万高原町中央公民館主任　片山　栄治
助　言　者　愛媛県教育委員会事務局中予教育事務所社会教育ボランティア推進員　玉井　俊幸
司　会　者　西予市三瓶南公民館主事　山本　親人
発　表　者　砥部町教育委員会社会教育課公民館係主任　野々下博子
宇和島市立清満公民館主事　清水　辰洋
記　録　者　四国中央市上分公民館主事　亀山　恭弘

〈分科会B〉　テーマ「安心安全な地域づくり」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　重信　昭雄

会場責任者　久万高原町中央公民館班長　中森　信子
助　言　者　伊方町総務課危機管理室室付室長　向井彦一郎
司　会　者　松山市和気公民館館長　芳之内淑子
発　表　者　八幡浜市穴井自治公民館前館長　須賀　成人
　　新居浜市立新居浜公民館館長　高田　実
記　録　者　伊予市中村地区公民館主任　栄口　瞬

〈分科会C〉テーマ「異世代交流を促進するための住民参画のあり方」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　武智　優
会場責任者　久万高原町中央公民館係長　渡部　和孝
助　言　者　宇和島市立吉田公民館館長　井上　教
司　会　者　西条市丹原公民館館長　野口　一
発　表　者　東温市奥松瀬川分館分館長　渡部光右衛
　　大洲市白滝公民館嘱託職員　池田　正司
記　録　者　八幡浜市立磯津地区公民館主事　福宮　一憲

〈分科会D〉テーマ「学校との連携・協働」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　青野　栄一
会場責任者　久安高原町柳谷地区公民館主任　大西　康雄
助　言　者　新居浜市立角野公民館館長　横山　泰茂
司　会　者　愛南町東海公民館主事　田下　弘之
発　表　者　西条市楠河公民館主任主事　川又　達也
　　伊予市中央公民館係長　西岡　美加
記　録　者　鬼北町日吉公民館主事　新谷　茂

〈分科会E〉テーマ「伝統・文化の継承」

運営責任者　愛媛県公民館連合会理事　大木　敏郎
会場責任者　久万高原町中央公民館主任　中川　昌美
助　言　者　四国中央市天満公民館館長　秦　英治郎
司　会　者　松前町東公民館館長　栗田　眞吾
発　表　者　内子町立小田自治センター館長　上山　淳一
　　今治市玉川公民館館長　菊川　満朝
記　録　者　大洲市長浜公民館課長補佐　山下　敦司

【分科会協議記録】

分科会A「高齢者が活躍する地域づくり」

1　発表要旨

○砥部町中央公民館　主任　野々下　博子
「高齢者が活躍する地域づくり」
1　砥部町の概要
2　砥部町中央公民館の取組
(1)　生き生きシルバークラブ
(2)　しめ飾りづくり教室
3　取組の課題と成果、今後の展望

○宇和島市立清満公民館　主事　清水　辰洋
「きょうようある高齢者のすすめ」
1　地域の概要
2　健康な身体づくりについて
3　世代間交流への取組について
4　環境美化・福祉への取組について
5　おわりに

2　質疑応答

Q　大洲市今坊公民館　館長　久保　貴美男
シルバークラブと老人クラブは別の組織になるのか。しめ縄づくり以外での活動はあるのか。

A　砥部町中央公民館　主任　野々下　博子
シルバークラブと老人会は別の組織になります。老人会はスポーツなどの活動をしている。シルバークラブは公民館主催事業に協力してもらっている。
砥部焼を活用した事業を検討中である。

Q　伊予市公民館運営審議会委員　宮田　昭典
えがお食堂について、社協との連携や協力体制はどのようになっているか。

A　宇和島市立清満公民館　主事　清水　辰洋
同じゴールを目指す団体でも、その中にいる人は様々なので、

まとめようとすると反発が生まれる、緩い連携で学校の部活のような関係でいいと思う。色々な事業を行っているが、それぞれ構成する人はバラバラである。

3　テーマに対する研究協議

○宇和島市立北灘公民館　館長　越智　喜久春

かつて敬老会で老人クラブの方も交えて発表会を催していたが、三年程前より人が集まらなくなり、北灘地区全体での集まりがなくなった。老人クラブと話す機会があり、なぜこんなことになったのか話をしたが、車がなく不便であり、テレビを観ていたら外に出なくてもいいという意見があった。他に老人クラブという名前が良くないという意見もあった。名前から元気な高齢者が活躍する地域作りを考えていく活動をしたらどうか。

○助言者　松山市中予教育事務所社会教育ボランティア推進員　玉井　俊幸

盛んにやっていて来なくなったということはやりすぎたのではないか。

老人クラブの人は、「しんどい」と減少していっている。老人クラブの維持は並大抵のことではない。

○司会者　西予市三瓶南公民館　主事　山本　親人

どの地域でも同様で、人口減少に伴い、事業運営での負担が大きくなってきていると思うが、どうか。

○西予市三瓶北公民館　主事　安藤　彰祥

しめ縄作りを高齢者と小学生を対象で行っており、老人クラブを指導者として迎えている。他にも竹を使った物作りで、水鉄砲作りなどもしている。

○愛南町中央公民館　館長　清水　雅人

人口減少に伴い、地域での役割を担う年齢層が上がってきており、高齢者の負担が増えている。私の地域では、消防団が地域の担い手として活動してくれている。

○鬼北町立泉公民館　主事　二宮　恵一

泉公民館では、高齢者の活動が活発で、しめ縄作りや田植え、稲刈りを通して地域の子ども達と交流している。

老人会の名前については、変更の試みもあるが、必要があるのかと思っている。

○四国中央市新宮公民館　館長　出水　武美

自治会の存続が危ぶまれているので、公民館や社協でのコミュニティ活動が大事。小中学校では、特区制度があり、その中でも三世代交流を行っている。

老人会についてだが、入会したら役を持たないといけないので、なかなか入ってくれない。シルバー（六十五歳）がゴールではなくゴールド（八十歳）を目指す活動をしてはどうか。

○助言者　松山市中予教育事務所社会教育ボランティア推進員　玉井　俊幸

高齢者の役割がますます大きくなってきている。子どもたちに公民館での活動をさせて、地域の風、においをかがせる。これは染み込み型という江戸時代からある学びの形である。

○宇和島市立北灘公民館　館長　越智　喜久春

子どもたちのためになにかしてあげたいという気持ちで、段ボールで仮面を作ってイベントを行ったが、これが好評で喜ばれた。思い出に残る大事な事業になったのではないか。

地元のお祭りで漁火太鼓をしている。他に元気村協議会という活動で、来年度に向けてなにをしようかと考えている。小学校で色々なことをしたいという思いから、アクションペインティングの実施を検討している。

○八幡浜市立松蔭地区公民館　館長　八木　徹

八幡浜市も高齢化率が高くなり、今日の協議を参考にさせていただいた。

海岸地区になるが、統廃合によりできた廃校を宿泊施設として利用している。国際的なマウンテンバイクの大会の宿泊所や豪雨災害時の避難所にして活用をしている。

○宇和島市立御槙公民館　主事　矢儀田　雅幸

御槙地区でも、高齢者の方にしめ縄作り等で活躍してもらっている。適材適所という考え方で、得意なことや好きなことで活躍してもらえたら、集まりにも足を運んでくれるのではないか。

○司会者　西予市三瓶南公民館　主事　山本　親人

私から皆様にアドバイスをいただきたいことがあります。高齢者、老人クラブと言いましても一括りにできないのかと思う。前期高齢者と後期高齢者とでは地域との係わり方や役割がそれぞれ違うのではないのかと思う。そのような点で工夫やアドバイスをいただきたいが時間が迫ってきているので、また個別にお願いします。

4　指導・助言

○助言者　松山市中予教育事務所社会教育ボランティア推進員　玉井　俊幸

私は、風早自然学校「ポレポレ」という子ども達に自然体験をさせるボランティアをしている。その活動の中で米作りをしている。その過程でしめ縄作りや米味噌作りも始めた。地域のおばちゃんがよく指導してくれている。こういった点である活動を増やしていき、点と点を線にする活動ができないかと考えている。

補助金の申請についてだが、私も「ポレポレ」の申請をしたが、なかなか報告は難しいので、毎年苦労している。公民館の主事が協力してくれたらいいと思っている。

人生百年時代という言葉があります。八十二歳になったが年を取った気持ちはない、九十歳くらいまでは百姓をしたいという気持ちがあったが目標が伸びて百歳にした。人間は自分で年を取ったと思うと身体もそうなってしまう、気迫が身体の細胞を活性化させるのではないかと思っている。人生百年時代という言葉を持っておいてほしい。半分は社会貢献のために、半分は自己実現のためにというのが私自身の良い割合である。

若松さんの話は非常に良かった、私が思うキーワードが全て出ていた。町作り、協働、適材適所、自治、当事者意識。高齢者を活躍させるためには、まず一人一人の性格や個性、どんな仕事をしていたかなどをしっかり知ることが大事ではないか。

高齢者から積極的に取り組んでもらうために、受け身から能動に転換することが必要だが難しい。まずは欲求課題、やりたいことに取り組んでもらうことできっかけ作りをする。その過程で必要課題に触れるようにし、公民館活動をしないといけないという意識を持たせる。また学習をする時はグループ活動を取り入れ、そこでまとめたり、発表することの訓練をすることが大事ではないかと思う。高齢者に活躍してもらうようにするのは難しいが、公民館の館長や主事がファシリテーターの役割をすることが大事である。

分科会Ｂ「安心安全な地域づくり」

1　発表要旨

○八幡浜市穴井自治公民館　前館長　須賀　成人

「地域の結（きずな）で備える」

1　真穴地区の概要

2　夜間訓練取組の概要（平成二十九年度）

3　おわりに

○新居浜市立新居浜公民館　館長　高田　実

「防災キャンプ！防災訓練そしてジュニア防災士への第一歩」

1　新居浜地区の概要

2　新居浜公民館の事業紹介

3　防災キャンプから防災訓練

4　平成三十年度の「ジュニア防災士への第一歩」の取組

5　今後の課題

2　質疑応答

Q　宇和島市立奥南公民館　主事　堀尾　光

穴井自治公民館へ伺いたい。参加者が多数いるが、募集方法はどのようにしているのか。地震や津波などの災害によって専門的な訓練も考えているのか。また、役所との連携について教えてほしい。

A　八幡浜市穴井自治公民館　前館長　須賀　成人

募集方法については、主に地区の回覧板だが、口頭での周知も行っている。専門的な訓練ということで、津波を想定し、高台へ避難する訓練を実施している。役所との連携については、訓練時に危機管理担当の職員にアドバイザーとして参加いただき、最後

に講評をいただいている。また、今年度においては、豪雨災害の対策等の説明を行った。

Q　新居浜市立高津公民館　館長　小野　健治

両公民館へ伺いたい。休日の事業になると学校との調整が必要になると思うが、その際に苦労した点や工夫した点があれば知りたい。また、地域の防災組織と公民館との役割、そして地域の防災士がどのような役割を果たしているのか。

A　八幡浜市穴井自治公民館　前館長　須賀　成人

訓練は平日の夜間に実施しているため、学校との調整等は行っていない。災害というものはいつ起こるかわからないので、時間も選んでいない。各組織の役割ということだが、ある一定の人間がやるのではなく、地域の住民が考えて問題点を探し出すなど、そういう取組をすることで、安心・安全な地域づくりをするが大事である。

A　新居浜市立新居浜公民館　館長　高田　実

防災訓練やキャンプは、休日にしているが、学校施設の利用に関する調整くらいで特に苦労している点はない。今後の取組として小中学校での防災参観日を計画している。各組織の役割についてだが、実際は自分たち自身が、内容を深く理解し、必要なことを実施するというところまではできていない。防災士は訓練の運営に協力している。

Q　宇和島市生涯学習課　主任　梶田　智幸

穴井自治公民館へ伺いたい。自主防災組織には様々な班があると思うが、その班の人員は固定なのか。また、今年度の豪雨災害時において、宇和島市は地区の自主防災組織が機能したところと全く機能しなかったところがあったが、穴井地区はどうか。

A　八幡浜市穴井自治公民館　前館長　須賀　成人

自主防災会の会長は、自治公民館長が兼ねることとなっているので、替わっている。班の人員については、基本的には固定。しかし、給食・給水班については、経験を次に伝えていく意味から、四名のうち毎年二名は入れ替えている。豪雨災害についてだが、穴井地区は公民館を避難所としていたが、幸いなことに避難者はいなかった。少し災害があったところもあるが、それについては、自主防災組織ではなく、土砂の撤去に係る機械の準備などを含めて、区での対応であった。

Q　宇和島市立奥南公民館　主事　堀尾　光

地域にも身体障害者がいると思うが、そういった方の搬送などについてもジュニア防災士の訓練や学習を実施しているのか。ジュニア防災士の資格、認定はどのようになっているのか。また、子どもではなく、大人対象の防災学習の場はあるのか。

A　新居浜市立新居浜公民館　館長　高田　実

身体障害者の方に対応した学習については、車イスに乗せて搬送する訓練を行ったり、目の不自由な方に対応したものとして、手を繋いでトイレに連れていくといったことをしている。障害者本人に協力してもらうことはできていないが、今後検討したい。防災士の資格認定についてだが、資格というものは存在しない。新居浜市としてもない。しかし、防災キャンプに参加した子どもたちには、終了証とメダルを渡している。大人対象の訓練については、公民館としてというわけではなく、校区全体で実施している。

Q　宇和島市立奥南公民館　主事　堀尾　光

先ほど、防災キャンプ後に、メダルを渡しているとのことだったが、その予算について知りたい。

A　新居浜市立新居浜公民館　館長　高田　実

各地域からの助成があるので、そこから支出している。

Q　宇和島市生涯学習課　主任　梶田　智幸

新居浜公民館へ伺いたい。防災キャンプ等を通じてジュニア防災士の育成をしているが、中学生も対象としているのか。その場合、目標人数はあるのか。また、校区内にどれくらい防災士がいるのか。防災訓練の参加者は固定されてきているのか。そして、訓練にあたっての小中学校の先生の参加はどうなのか。企画段階でも参加しているのか。

A　新居浜市立新居浜公民館　館長　高田　実

中学生も対象としているが、目標人数を設定しているわけでは

ない。現在の中学生は、ボランティア意識が高く、運動会や文化祭の準備や片付けなど積極的に参加している。そういうところから中学生には将来的に、防災士の資格取得し、地域に貢献してもらいたいと考えている。現在、校区内の防災士は二十八名いる。防災訓練の参加者については、固定されていない。特に子どもについては約三分の二が初めて参加している。先生方は企画段階では参加してもらっていないが、訓練当日には参加してもらっている。

3　分科会テーマに対する研究協議

○松山市和気公民館　運営審議会委員長　小池　昭秀

毎年七月、海の日に和気浜で大声大会を実施している。これは例えば、「津波だ！逃げろ！」など防災に関することを叫び、競い合う大会である。毎年、約一二〇〇人の参加があり、このようなイベントを通じて防災意識を高めてもらう活動をしている。

4　指導・助言

○伊方町総務課危機管理室室付室長　向井　彦一郎

○穴井自治公民館について

① 毎月一回、防災の日を設けて放送で呼びかけをしている。続けることは難しいことだが、今後も継続して行って欲しい。

② 高齢化が進んでいる穴井地区において、訓練の参加率六十六％は非常に高い数字。

③ 夜間訓練を実施する地域が少なくなってきている。災害はいつ起こるかわからないので、早朝訓練の実施も検討してみてはどうか。

④ 訓練中は、あらゆることを想定して、頭に座布団などを被るというようなことも取り入れて実施して欲しい。

⑤ 要支援者への対応訓練や備蓄品を活用した炊き出し訓練を実施し、また現場に見合った訓練ができている。

⑥ 今後とも訓練後の課題を活かして実施して欲しい。

○新居浜公民館について

① 小学生高学年を対象とした防災キャンプの実施は、吸収力の高い子どもたちにとって、とても良いこと。子どもから保護者に伝えてもらうことも大切である。

② 炊き出しに関しては、フライパンなどを使用するのではなく、袋やサランラップを使用するなど工夫した訓練が出来ている。

③ 防災マップは、図上で作成するのではなく、現場に足を運び、距離や時間、障害物などを実際に体感し作成することが大切である。

④ 防災訓練は訓練のための訓練とならないように、ブラインド訓練を実施するなど工夫して実施して欲しい。

災害はいつ起こるかわからない。そのため、家族で集まる場所を決めておく、非常時に持ち出す物を準備しておくなど発生時に混乱しない用意をしておいて欲しい。そして、災害時にはまず、自分たちの命を守ることを考えてもらいたい。

分科会Ｃ「異世代交流を促進するための住民参画のあり方」

1　発表要旨

○東温市奥松瀬川分館　分館長　渡部　光右衛

「公民館を起点とした地域おこしの実践」

1　奥松瀬川地域の概要

2　公民館を起点とした地域づくりへの取組」

(1)　ふるさとづくりワークショップ

(2)　奥松瀬川創生会議

(3)　取組の具体的活動

ア　産直品の販売

イ　教室（ピザ・手芸・パン・竹工芸）の開催

ウ　交流農園の充実

エ　障害者の活躍

3　活動の成果

4　今後の展望

○大洲市白滝公民館　嘱託　池田　正司

「異世代間に芽生える持ちつ持たれつ交流」

1　白滝地区の概要

2　白滝公民館の特色
(1)　白滝地区を代表するイベントの運営
(2)　学級・教室の運営
(3)　異世代間の交流
3　白滝公民館の主な学級や教室の取組（平成二十九年度）
4　平成二十九年度の主な活動事例
(1)　「坊ちゃんスタジアム試合体験」
(2)　「ワクワクドキドキ親子乗馬体験」
(3)　「大洲城甲冑体験」
(4)　「マジックショー」
5　終わりに

2　質疑応答

Q　久万高原町公民館中津分館　館長　稲田　稔久

奥松瀬川分館　分館長さんに二点ほどお聞きします。一点目は奥松瀬川創生会議を運営していく、諸経費はどのようにしているのですか。二点目は同じようなことですが、交流拠点の「ほっこり奥松」の施設の運営管理の経費はどのようにされているか、その二点をお聞きします。

A　東温市奥松瀬川分館　分館長　渡部　光右衛

経費については交流拠点「ほっこり奥松」にて販売している収益で運営しています。例えばパンを作ってそれを販売して、また野菜、手芸品等を販売しています。その売上が約二万から三万円くらいの収益があります。大体それで賄えています。費用がかかるのは水道光熱費、それと店番をしてくれる方に半日五百円あげています。今のところはその収益金で何とかやっています。当初の施設の整備については国の地域創生資金を貰っています。それから地域おこし協力隊の方、地元の方々の考え等を考慮に入れて運営しています。その「ほっこり奥松」にて販売の収益金で何とか経費を賄っています。

Q　伊予市教育委員会社会教育課　課長　山岡　慎司

奥松瀬川分館さんにお聞きします。私の住んでいるところも高齢化が進んでいます。自分たちでいろいろな施設を作っているようなイメージですが「ほっこり奥松」の活動交流拠点まで自分たちで作っていますが、今後このような施設を作り予定があれば教えて下さい。それともう一点、できるだけお金を外に出さないで自分達のところで消費しようと言うことだったと思います。そのなかでの取組等があれば教えてもらいたい。それと夏に子どもたちと妖精さがしをすると話をされましたが、それは民話として十年後、五十年後伝わっていくと思います。夏、妖精さがしをした結果があればお聞かせ願います。

A　東温市奥松瀬川分館　分館長　渡部　光右衛

子ども達に以下に思い出を残すか、奥松瀬川ではワークショップから生まれたのですが、自然の中で人家から離れている（昔は人が住んでいました）。人里離れた谷あいに入って行って感じたときにある老人が「太古のたとえ」と表現されました。その時にここにいた子どもにここにどんな妖精がいるかと聞いたら「岩に棹差しているだけよ」と言いました。それでここを「妖精の里」にしたらどうかとと提案しました。その子ども達が十年後、五十年後になった時に自分達の故郷はここにあったんだということで、故郷を再確認するという。子ども達に、大人たちにも妖精の民話を完成していくことが将来のことを考えてときに大事になっていくのではなかろうかと思っています。地域の開発についてですが、地域で自分たちはどうして生きていくかを考えなくてはならない。それについては地域を再生したいと考えています。壊滅している集落を再生しようかと考えています。そこに魅力を感じた若い子等が訪ねてきたりしています。そしてその施設の中に若い子らが入ってきます。若い子らは自分達のやりたいことの考えを持っています。いかにしてそれを引き出してやるか。それによってこの地域は変わってくると考えました。今になって地域のご婦人方も元気になって参加してくれるようになりました。新しい施設の計画ですが、今までやってきている施設の完成、ツリーハウス、さっき話した集落等の再生をやりたいと考えています。集落等の再生は費用、地元住民の協力者も必要となってくるので難しいかなとも思っています。

Q　八幡浜市立川上地区公民館　主事　楠　理恵

白滝公民館の池田さんにお聞きします。素朴な質問ですが、「マジックショー」について関心を持っています。川上地区公民館の子ども達も好きなマジックショーをしてやりたいと思っています。自分たちで作ったテーブルマジック等をするのですが、やっぱり本物のマジックショーを見せてやりたいと思っています。その費用ですがマジシャンの方にどのくらい支払えば来て貰えるのですか。また連絡等はどのようにすればよいのか、素朴な質問ですがお願いします。

A　大洲市白滝公民館　嘱託　池田　正司

ここだけの話でいいですか？通常だと二万から三万円くらいかかります。後は交渉次第です。連絡先は後で教えてあげます。

Q　宇和島市立玉津公民館　主事　久米　佳純

白滝公民館の池田さんにお聞きします。年間たくさんの学級・教室を行なっていますが、特に文化教室等を多くの回数行なっているので驚いています。このような回数、内容をどのように計画しているのかお聞きします。それとどのような人が関わっているのですか。又講師の人にどのようにして来て貰っているのですか。

A　大洲市白滝公民館　嘱託　池田　正司

この事業に対しては共同活動支援の人が野球教室が四名、読み聞かせは六名の人に参加してもらっています。読み聞かせは四名が一回ですので後の二名は第二水曜、第三水曜を担当していただくように最低一名はついています。それ以外のときは私（池田）が出るようにしています。企画についてですが。いろいろな所でテレビを見たり、インターネットを検索したりしてそれが白滝公民館でできるかどうかを考えます。また住民の方々からこんなことを「やったよ」とか直接話を聞いたり、来て貰ったりしています。

3　分科会テーマに対する研究協議

○司会者　西条市丹原公民館　館長　野口　一

これより分科会テーマについて研究協議を行います。先ほどの発表や質疑、応答を踏まえて皆さんのご意見、実践事例などをお聞かせ頂きたいと思います。何かありましたらお聞かせください。感想でもかまいませんので、また各公民館取組の中での悩み、行き詰まり、解決方方法等がありましたらお聞かせください。

○伊予市公民館運営審議会委員　中井　淨

広報区の活動の取組についてです。伊予市三島町と言う地域です。一五〇世帯の人たちが住んでします。その中から海外から研修に来ている女性の方々のことです。その人たちとのコミニュケーションを模索した時もありました。地区の者からするとうっとおしい、厄介者との位置づけもありました。ここ三年ほど中国の研修生からベトナムの研修生に切り替わって、この機会に住民と彼女たちとの交流関係をスムーズな関係にしたいと思いました。今年の秋祭りに子ども神輿をだす予定でしたが神輿を担ぐ子供がいなくて台車を作ってその上に載せて巡行することになったが、中学生たちが神輿を担ぎたいと言い出して今年は中学生と小学生の混合で神輿を担いで町中を練り歩くことが出来ました。その祭りにベトナムからの研修に来ている女性達と一緒にお祭りをしようと思いました。それでその会社にお願いしに行きました。その会社も快くご協力を頂きました。当日は十五名ほど参加してもらいました。華やかな歓声の中秋祭りが挙行できました。地域のお年寄りたちが驚いて、ビデオまで持ち出して町中が急に賑やかになりました。子どもたちとは登校の時間と通勤の時間が一緒なので海外の人ではあるが言葉のやり取りはできている。大人たちはできていないので、これで一歩取っ掛かりははできたかなあ、と思っています。このような事例はあまりないと思いますので参考になればと思います。

○松山市潮見公民館　館長　中西　恒博

今年公民館長を仰せつかって分からないまま公民館長をやっております。皆さんの話を聞いていると、公民館はそんなにいろいろとやることがあるなあと驚いています。松山市では五年前からまちづくり協議会が出来ています。これはその地区の各種団体、グループをすべて網羅して、まちづくり協議会がカバーしています。公民館もその中の一つです。私は公民館の館長としてまちづくり協議会に副会長をしています。例えば異世代交流は公民館が

やらなくても社会福祉協議会がやってくれています。公民館は場所を貸すだけです。公民館主体の事業は十あるかないくらいです。後は所属している団体がすべて責任を持ってやってくれます。それをまちづくり協議会が助言して他の団体にバックアップしてもらっています。そういう制度が出来ているので皆さんのように苦労はしません。皆さんは私に対して違和感を覚えるかもしれませんが、私はここへ来て皆さんの話を聞いて違和感を覚えました。そういう公民館もあると参考までに話しました。

○久万高原町公民館中津分館　館長　稲田　稔久

全体会の中でも話が出ましたが、各地域の小学校、中学校の学校設備の有効活用についてです。私の地域の中津小学校が平成元年に閉校になりました。その閉校になった小学校の活用が地域の課題になりました。その小学校は、今世代をつなぐということで、大人の音楽教室に利用しています。校舎を建て地域の方に校長になってもらい、音楽イベント等を学校の施設を利用しながらやっています。音楽活動を通して地域の活動をしています。中津カラオケ大会を、八月には東日本震災、熊本地震災害、西日本豪雨災害等を元気に、また義援金を贈ろうということでミニ音楽祭も行っています。今回で八回目になります。今回は新沼謙治さんが来てくれます。そんなことで学校を中心に録音スタジオ等も作ったりして活用しています。このような学校の施設を利用して宿泊したいと言う小学生もいて今年は合宿を行いました。今年は四組の方々に利用してもらいました。今年からは学校施設も公民館の委託管理になりました。この学校をいかに活用していくかを考えています。改修もしたいけど、その改修経費、運営経費をどのようにすれば良いか等いろいろ問題もあります。そのような活動をすることによって移住、定住も増えてきています。以上のような活動をしてこれからどのように取り組んでいくかを地区の方みんなで考えています。以上事例として報告します。

○司会者　西条市丹原公民館　館長　野口　一

奥松瀬川分館の「ほっこり奥松」の件ですが、この施設の教室（ピザ・手芸・パン・竹工芸）が出来るまでに、この教室の講師又は先生は私が担当するとかと名乗り出たのか、またその教室の担当者を探しに行ったのかその辺のことをお聞きしたい。

○東温市奥松瀬川分館　分館長　渡部　光右衛

手芸については地元に手芸が上手な人がいましたので、その方が先生でその方を中心に人集めをしてもらいました。現在は参加者が多くなって一回では教室に入りきれないので二回に分けて行っている状況です。パン・竹工芸の教室は地区外から来てもらっています。これは地区内の人と知り合いだったりしてきてもらっています。最初はあんな田舎へ行って出来るのかと言ったりしていたのですが、今ではパン教室も一日ではできない状況になっています。竹工芸の方は地元の方は辞めたのですが、先生を頼って地区外からも来ています。高松の方からわざわざ竹細工をやりに来る人もいます。いろいろな教室を開くと人は自然と集まってきます。ここでも音楽好きな人たちが三か月に一回「山の音楽会」をしています。二十人くらいしか入れないところに三十人以上来て収容しきれない問題もあります。音楽好きな人、音楽を自分で発表して見たい人が多いということで、そんな場所も提供したりしています。

○西条市徳田公民館　館長　渡部　武志

奥松瀬川公民館、白滝公民館、その他の公民館の方々の発表を聞いていると小学生の参加する行事が多くなっています。小学生が行事等に参加するとなれば、小学校との関連、ＰＴＡとの関連等はどうなっているのですか。また白滝公民館においては平日の日に行事を行っているが、このような時はどうしているのですか。最近私の公民館におきましては、農村地帯ではありますが二十才から四十才くらいまでの者は働きに出かけているので、昼間の公民館行事には参加することが出来ません。このような若い世代の方々の参加をどうすれば良いか思案しています。また司会の方が言われていたが人口減少の中での地域つくりを進めていくとなると、教育だけでなく、行政の担当者の支援も必要になるのではなかろうかと思います。その辺をお聞きしたい。

○大洲市白滝公民館　嘱託　池田　正司

白滝公民館ですが、公民館と小学校・ＰＴＡとの関係ですが、現在白滝小学校は閉校になり、今は長浜小学校へ行っています。水曜日は平日ではありますが、長浜小学校の先生たち研究が水曜の午後三時から始まるので子供たちは二時四十五分頃にスクールバスで集団下校する。帰りにそのスクールバスが公民館前を通るので、行事に参加する子どもは公民館におろしてもらいます。逆に水曜日以外はできません。業者の調達ということですが個人的に話をします。「お金はありませんので」を殺し文句にして、また公民館の仕事ですと話し予算内に収まればお願いします。もちろんダメな時もあります。小学校との関係ですが、今の長浜小学校の校長先生が以前に白滝小学校にいた関係もあり、また白滝小学校にいた教頭先生がいま長浜小学校の教頭先生でいる関係で連絡等は密に取りやすい状況になっています。

○東温市奥松瀬川公民館　分館長　渡部　光右衛

奥松瀬川公民館の活動の特長は、数年来やっているが夏休み、冬休みを中心に活動しています。夏休みにキャンプをしていた頃の子どもたちが三十代四十代になっています。現在地区外に出て行っていますがその頃の子どもたちがお祭り等に帰って来て、お参りにも来てくれます。その辺は大変嬉しく思っています。ただ最近の傾向として小学生の間はまだいいのですが、中学生になると部活があるとか、サッカーにも熱心な子どもたちがいるので関わりが少なくなっています。これが残念なことです。しかし今後も子どもたちとの関わりは続けていこうと思っています。地域で遅れていたのはおばちゃん方（六十才位）の社会参加に対してのレベルが低かったのが、「ほっこり奥松」が出来てからは参加するようになってきたのが今の現状です。ただ女性より子どもたちの方が、人数は少ないが地域に対して理解を持っているのではなかろうか。

○司会者　西条市丹原公民館　館長　野口　一

西条市徳田公民館館長さんの質問の中で住民活動に行政も関わっている二ではなかろうかとの質問もありました。これに対して行政がこうしてくれたとか、ありましたらご報告お願いします。潮見公民館の報告にもありましたが「まちづくり協議会」等を立ち上げる時に行政の指導・協議等があったと思いますがそのようなことがあればお願いします。

○松山市潮見公民館　館長　中西　恒博

「まちづくり協議会」に対しては行政の協力はすごいです。例えば町内会がカーブミラーを設置してほしいと県に要望してもなかなか付けてくれません。しかし「まちづくり協議会」に頼むと協議会が県と交渉してくれます。それで直ぐに設置してもらえます。松山市の公民館の予算が減少しています。それでなんでも地元でやってください、地元でやってくださいというばかりです。先日も敬老会をしたんですが、予算が少ないのでどうしようかと思い、協議会に助けてもらうこともあります。また、子ども相手というのは学校との関係もあります。学校の先生方もよく公民館に相談に来てくれます。先日も中学生の公民館の職場体験を二日間させてくださいと言うことで公民館の職場体験をしてもらいました。どのような事をしてもらおうかと考えて、潮見町の町巡りをしてもらいました。その反省文には「私は中学一番の潮見通になりました。」と書いてあり職場体験をやってよかったと思いました。行政の支えについては松山市の場合「まちづくり協議会」を通じて言えば仕事がやりやすくなりました。

○大洲市中央公民館　館長　堺　勝俊

潮見公民館の「まちづくり協議会」についてお聞きします。他の公民館では地区があって、その下に教室・学級等の組織になっていますが、潮見公民館の「まちづくり協議会」の体制はどうなっているのですか。

○松山市潮見公民館　館長　中西　恒博

「まちづくり協議会」はその地区のトップに立っているのではありません。この地区で三十団体くらいあるのですがその団体は構成団体になっています。三角になっているのではなく円になっている状態です。それで鳥もちみたいに、お互いをくっつけてあげるような立場です。例えば中学生が学区内での清掃活動をする時企業に相談すると、そこが土地改良区の理事さんに軽トラック

を三台貸してやってくれと頼むと快く貸してくれます。また運動会で埃が立つから水を撒いてほしいと頼むとすぐに消防団が来て水を撒いてもらえる。すぐに連絡が取れて解決していく。ここ五年ほどは各種団体のつながりがスムーズになっています。

○司会者　西条市丹原公民館　館長　野口　一

残り時間も少なくなってきました、その他の方ご意見ありませんでしょうか。この辺で研究協議を終わります。皆さん発表・ご意見有難うございました。

4　指導・助言

○宇和島市立吉田公民館　館長　井上　教

午前中に行われて全体会の時の吉田中学校の坂本先生の吉田中学校のコミュニティー・スクールの話がありました。私も運営協議会に入っていますので、この場を借りて少しお話をさしてもらいます。コミュニティー・スクールは地域住民と一緒になって行います。昨年度は吉田中学校ではクリーン吉田ということで、海岸清掃、夏祭りの名無し踊り子に子どもたち二百名ほど参加しました。それと秋祭りのお練り（県の重要無形文化財に指定）に従来は地元の人達が担いでいたが、高齢者が多くなって担ぐ人がいない状態なので中学生二十名ほどに参加してもらいました。女の子も参加したいと言うことで参加した。また高校生にもお願いして参加してもらいました。西条・新居浜の祭りには若者が多く参加しているが、どうしてかと聞くと、小さい時からお祭りに参加しているのでお祭りの時期になると帰って来てお祭りに参加する。吉田ではそういう状況になっていない。小さいころからお祭りに参加してもらい大人になって地区外に出ても、お祭りの時期になると帰って来てもらいたい。かつて中学生は、入試、部活というイメージが強かったが、コミュニティー・スクールをしてから三年間経った今は、中学生が身近な存在に感じるようになったと住民からよく聞くようになりました。先の西日本豪雨では吉田公民館は床上三十センチメートルの浸水被害を受けました。この後の片付けと同時に公民館は避難所になりました。当初は混乱しました。しかし、主事・市の職員・県の職員に応援をして頂き、九月二十四日に避難所を閉鎖することが出来ました。

奥松瀬川分館、白滝公民館の二人の発表の感想を助言に代えさせてもらいます。奥松瀬川分館の渡部さんの「公民館を起点とした地域おこしの実践」ですが、子どもを中心とした公民館活動で、地域の再生、地域おこしは素晴らしい事例だと思います。子ども達と共に行っている「ふるさとワークショップ」は地域の歴史を知り、課題を見つけ、課題解決の取組を行っている。「奥松瀬川創生会議」を立ち上げて「高齢者の生きがいつくり」「三世代での観光開発」等に取り組んでいる。具体的には野菜、手芸品の販売、それから（ピザ・手芸・パン・竹工芸）教室の開催、耕作放棄地を農園によみがえらせてバーベキュー場、ドッグランの整備を行ったりしています。それと「ぽんぽこ農園」を整備したりしている。またイラストが好きな障害者に地域を案内する看板を担当してもらい、そのキャラクターが地域のイメージキャラクターになり地域の顔になっています。今障害者の雇用が大きな問題になっているが、ここ奥松瀬川では障害者と一体となっています。このような結果、地区外からの参加者が増え農業をする人も出てきて、若者が訪ねてくるようになりました。住民が気軽に立ち寄れる「ほっこり奥松」が出来たことにより新たな地域交流拠点が出来ました。野菜、手芸、パンの販売が日常化された。それが地元の経済もうるおす。同時に「ほっこり奥松」が高齢者と子どもたちの見守り活動にもなっています。この事業は一石二鳥、また三鳥にもなっています。素晴らしい成果になっていると思います。助言者には事前に資料が送られてきます。それを読んで「ほっこり奥松」に行ってみたくなって訪ねていきました。店番の奥さんに色々と聞きました。ここは古民家を改造して作ったということでした。古民家の再生改修には補助金が出ました。普段の運営は自主的に行っています。このようになるまでには渡部分館長さんの努力、リーダーシップ、地域の方々との連携、絆があってこそ出来るのではなかろうかと思いました。

次に、大洲市白滝公民館嘱託の池田さんの「異世代間に芽生える持ちつ持たれつ交流」についてです。表題の「持ちつ持たれつ」

は異世代間の仲間意識が芽生えてきて、とてもいい言葉だと思います。白滝公民館が取組んでいる沢山の学級、教室があり、ディスコン教室、ターゲットバードゴルフ教室、水曜教室、野球教室等の沢山の行事を行っています。なぜそんなに沢山の学級、教室が出来るのか、その教室、学級が自主的に運営しているからなのではないでしょうか。自分で考え行動する、それが自主性を育てる。そのことが沢山の学級、教室を運営できている。その自主性が万が一災害等に遭った時に避難所運営等に生きてくると思います。先の西日本豪雨の時に吉田公民館では避難所を開設しました。避難所運営は行政だけでは無理なので避難した住民の中から自主的に運営することが大切なことです。この白滝公民館の住民の皆さんが自主的運営を続けていけば、あってはならないことですが、万が一災害等に遭った時に役に立つと思います。それとＤＶＤを作成したり、毎月館報を発行したり、これもなかなか出来ないことです。情報を発信することが公民館を身近にすることになります。以上二館の発表は子どもたちを大事にしていること、将来子どもたちが地元に帰って来て、地域を担う二十年、三十年先を見据えた取組だと思いました。今後とも続けていってもらいたいと思います。奥松瀬川の分館長渡部さん、白滝公民館の池田さん有難うございました。

続いて吉田公民館の行事についてですが、吉田町では亥の子大会を行っています。各家庭を回って最後に公民館に集まって、亥の子の突きや亥の子大会をしています。四十年余り続いています。今年は災害があった関係で参加者は少なかったです。亥の子大会は愛護班が中心となって行っています。十二月には婦人会、老人会の方たちと子どもたちとクリスマス会をしています。クリスマスケーキを作ると同時に、ふるさと料理を、婦人会の方たちに教えてもらっています。一月七日には七草粥を婦人会の方たちに教えてもらい作っています。吉田公民館ではそのようなこともしています。参考になればと思います。

最後に公民館は人づくり、地域づくりの拠点になって重要な役割になっているのは皆さんご存知の通りです。異世代交流は公民館活動の原点です。地域づくりも異世代の協力なくして出来るものではありません。異世代は高齢者、働き盛りの大人、それから子どもたち、しかし実際は高齢者と子ども、働き盛りの大人は務めているので参加できない、大人の参加は農業している人か、商業をしている人しか公民館行事に取り込めません。またその様な事を知ってから組織づくりをしなくてはなりません。公民館は地域の連携、絆づくりが大切だと思います。そのために公民館がリーダーシップをとることが大事です。また定年退職された若い高齢者を巻き込むことも、連携することも大切です。住民のニーズを課題として取上げ、住民と共に解決していかなくてはならない。それと企画した学級・教室等が住民から、学級・教室はよかったと、来年もして欲しいと言われるような魅力ある企画づくりが大事ではなかろうかと思います。

分科会Ｄ「学校との連携・協働」

１　発表要旨

○西条市楠河公民館　主任主事　川又 達也

「～みんなで育む～」

１　楠河地区の概要

２　取組事例

(1)　放課後子ども教室

(2)　くすかわチャレンジ教室

ア　ドキドキ無人島体験

イ　わくわく干潟探検

(3)　その他

ア　河北中学校区小六対象学社連携事業

イ　楠河地区大運動会

３　成果と課題

(1)　成果

(2)　課題

○伊予市中央公民館　係長　西岡　美加

「学校・家庭・地域等と連携した家庭教育支援を目指して」

1　伊予市の概要
2　家庭教育を支援する公民館活動
3　サポートグループの活動内容
(1)　保育所・学校・地区公民館との連携
ア　参観日等の機会を利用しての学習会
イ　小学校での読み語り・紙芝居
ウ　大平地区子どもを語る座談会
(2)　関係団体や機関・企業との連携
ア　図書館で双海子ども読み語り隊とのコラボイベント
イ　地元企業・保健センターとのコラボイベント
4　成果と課題・方向性

2　質疑応答

Q　愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典
伊予市中央公民館にお聞きする。サポート隊の方々は職員か。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加
職員ではない。

Q　愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典
随分プロフェッショナル的な部分が見えたので職員かと思った。後、これまでに企業が参加していたか。参加していたらどういった企業があるか。また、これからの企業との予定はあるか。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加
今までは、ＪＡ青空おひさま市の方に来ていただき、講師や、伊予市の特産品、農産物を使った調理実習したことがある。また、テレビに出ている方（料理研究家：中村和憲氏）に来ていただき親子で一緒にお弁当を作ったり、様々な企業に協力してもらった。来年度は、市内のパン屋さんに声掛けをしてパン作りをお願いしてみようと思う。

Q　愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典
パン屋に依頼すると費用が発生するか。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加
伊予市社会福祉協議会の講師料で支払う。企業によっては色々な所で活動をすることで協力できる企業もあるのでお互い利点を生かし学習会を行っている。

Q　上島町弓削中央公民館　主事　中西　智恵
二人にお聞きする。西条市楠川公民館の、わくわくチャレンジ教室は小学校の児童だけか。それから、運動会に中学校のスタッフが参加しているとのことだが、中学校との連携でお願いしているのか、それとも公民館が主体となって募集しているのか。
伊予市中央公民館の子育てサポートグループは、元教職員や元保育士ととても充実したグループだと思うが、このグループができたきっかけを教えてほしい。

A　西条市楠河公民館　主任主事　川又　達也
楠河小学校のみが参加している。中学校のスタッフは公民館の方から中学校へ文書で参加依頼している。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加
サポートグループは地域連携推進事業というものがあるが、その推進事業の中でメンバーの方が伊予市でも作らないかという話から発足した。その方が校長先生ということもあり、学校関係のメンバーや知り合いに声掛けし見守り隊や学校の先生で広く活動する方々を集めて発足したのが始まり。それからメンバーの方たちの知り合いや、一緒に活動する方を広めていって今の形のスタッフになった。

Q　上島町弓削中央公民館　主事　中西　智恵
もう一点、この講座とかを組む時にアンケートを保護者の方にお願いし、どういう対象でといったことを決めていったという話だったと思うが、そのアンケートの取り方を教えてほしい。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加
四月にサポートグループスタッフが、小学校・中学校・保育所全部にチラシを持って学習会をしませんかと案内をする。全戸配布のチラシも、悩み事があれば学習会をしますからどうですかというのを広報を通じてするが、そこからあがってくる学習会の依頼はなく、保育所・幼稚園・学校といった大きい団体からの依頼が多いのが現状。

Q　新居浜市立神郷公民館　館長　柴田　誠治

西条市楠河公民館、伊予市中央公民館は、地域・公民館・学校の連携がスムーズになされているが、その連携を続けるために定期的な会合を行うのか、それとも公民館を運営する機関の中に三つのグループや地域の代表者が入って会合をしたり、会合のチームだとかその辺りをお聞きしたい。

A　西条市楠河公民館　主任主事　川又　達也

公民館の協力委員の中に、地域の方や学校の先生が入っている。会合は年三回行っている。

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加

サポートグループの方も年に二回運営委員会を開いているが、年度当初の運営委員会でどういった事業を今年度行うか協議するが、活動の幅が広くなってので、個々の学校や幼稚園、保育所が一緒にしないか、今では児童クラブも何か子どもたちのためにしたいが一緒にしてもらえないかといった話もあるので、サポートグループだけが学習会をするのは場所等の問題もあり難しい。一緒に共催することにより活動しやすいということもあるので、伊予市内の小学校・保育所・幼稚園・児童館すべての施設に、何でもしますと呼びかけ活動している状態。

Q　助言者　新居浜市立角野公民館　館長　横山　泰茂

名称を教えて欲しい。三十四ページ「平市島」「河北」、三十五ページ「永納山」、そして三十七ページ「北山崎」「大平」の読み方を教えてほしい。なぜ質問したのかというと、各地区、地域を大事にしている。もう一つは地区をＰＲというか知ってもらいたいという意図で質問した。

A　西条市楠河公民館　主任主事　川又　達也

へいいちじま（平市島）、かほく（河北）、えいのうざん（永納山）

A　伊予市中央公民館　係長　西岡　美加

きたやまさき（北山崎）、おおひら（大平）

Q　司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

放課後子ども教室の対象学年は何年か。運営は放課後子ども教室実行委員会となっているが構成委員はどういった方々か。

A　西条市楠河公民館　主任主事　川又　達也

民生児童委員、ＪＡ、小学校ＰＴＡ、保護者といった方々。

Q　今治市波止浜公民館　主事　小山　由

伊予市中央公民館の方から、（家庭教育・子育てサポートグループの）発足の具体的な経緯を教えていただいたが、楠河公民館での活動は十一年目で長い間活動を続けていて、どういった具体的な経緯で団体が立ち上がって活動を続けているのか。

A　西条市楠河公民館　主任主事　渡部　真由美

放課後子ども教室に関しては平成十九年度に立ち上げ、地域の方主体で取り組んでいる。そこにコーディネーターがおり、公民館は事務的なことをしている。内容に関しても全て放課後子ども教室の実行委員会の方で進めている。

3　各公民館での現状報告

(1)　参加者に聞きたいこと

(2)　成功例・失敗例

(3)　悩み　等

4　テーマに対する研究協議

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

これからは分科会テーマ（学校との連携・協働）についての研究協議を行う。先ほどの発表や質疑応答を踏まえながら皆さんのご意見をお聞きしたい。

○愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典

私は平城公民館館長の吉村ですが、地元長月公民館で小学校三年生以上を対象とした「長月夢の森」という活動を行っている。元々は学校が県の「森はともだち」推進事業の指定校になりそれが二年間、その後、他の学校の先生等がどうしても続けてほしいということで後二年間、それから後は公民館事業として継続して今七年目を迎えている。当初は学校だったので人が集まりやすく、子どもたちも保護者も学校も、実際には保護者は子どもたちから来てはいけないということで、学校の先生が一人だけ来ていたが、今は学校の先生もほとんど来ていない。来年度から公民館事業として三年目になるが、公民館事業になると人を集める、子どもを集めるのがどうしても強制的ではないので難しい部分が出

てくる。来年度からは新しい形、これまではおそらくどこの地域でも学校事業をすると地域、ＰＴＡ、地区が集まっていた。地区事業にすると学校の子ども、先生も集まっていた。でも最近は地区事業になると先生も忙しく来られない。そういう現状があるのではないかと思う。来年度からは、人を集めるのは学校、予算は公民館、それを手伝うのは地域という形を作っていこうと思う。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

私も愛南町であるが、長月という所は学校と地域がそれぞれ協力していく先進地といった公民館である。私の今の東海公民館には小学校があるが、学校の統廃合により学校の無い地域がある。城辺小学校には城辺公民館があるが、深浦公民館においての学校との共同はというと、城辺公民館と協働を進めていく中に、深浦公民館の活動についてもお願いをしていかなければならないという現状がある。深浦公民館も児童が城辺小学校へ通っているので、それの協力依頼は確かにしてもいいのかもしれないが、先ほど伊予市の発表にもあったように、児童が忙し過ぎてそんなに時間が取れない状況があるのではないかと思う。当然深浦公民館でやろうとしていた事業は城辺公民館でも同じようなことをするので、そこを変えていければ良いればいいのかもしれないが、なかなかそれが人集めというところで苦労している。そこで、学校が無い公民館というところでの児童相手の事業はどうなっているのか事例があったら聞かせてほしい。

もう一つ言うと、東海公民館も来年度東海小学校が統廃合により無くなり、東海公民館も小学校が無くなる。小学校が無い状態で地域の子どもたちを育てるという部分では必要になってくるが、児童だけを対象とした事業はなかなか難しい現状がある。来年度の児童対象の事業があるが、それを通していくべきか、やったところで児童が参加する時間があるのかというところで、今頭を悩ましているところである。

○宇和島市教育委員会

実は大事な視点があると考えている。今この場で答えはでないのかも知れないが、宇和島市でも小学校の統廃合については子どもの数が減っているということも一つの要因となっていて考えないといけない状況になっている。校区の中に公民館と小学校が一対一対応にならないところが沢山出来てくると思っているが、この度の研究大会のテーマとしてこれからの公民館の役割と課題とはという中で、そもそも趣旨の中に地域コミュニティの弱体化が進んでいる中でどのようにして地域コミュニティの再生、絆づくりをしていくか、ここが一つの課題だと思う。小学校なり中学校の数が減っていく中で、地域をいかにして活性化していくか。ある種学校の方は集約されるが地域事態が集約される訳ではないという中で、少なくなっていくことを将来の担い手としていかにして地域の中で、仕事であったり生きがいであったり、そういうものを見つけてもらえるような状況を作っていくのかというところが、ある種今後の公民館の役割の一つになっていくのだろうと思っている。しかしながら、学校と協働する上において公民館の管内に学校が無い、子どもが集まらないという状況がもしあるのだとすると、それは地域と公民館と学校とが協力した、今この地域で何が起きているのか、少子化だったり具体的にこの地域にどのような状況が進行しており、この状況をこのまま看過してしまうと十年二十年先にどのような状況が待っているのかということについての危機意識の共有がまだ足りないのかもしれないし、だとすると、どの様にしていきたいんだというビジョンなんかも共有できてないのかもしれないし、そもそもどのようなビジョンを作れるのか、そこからの始まりなのかもしれないと感じている。ただし、冒頭申し上げたように、じゃあどうしたら良いんだというところについて、具体的な答えが出ずにいる。もしかしたら、今日この場でヒントが頂けるのかもしれないと思いここに来ている。答えになっていないがそういう問題意識を持っている。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

高齢化、少子化というのは問題になっているところで、学校が無くなってからも深浦公民館という所で唯一運動会は残すことになり、グラウンドではできないので体育館の中で誰でも出来るような競技で、深浦公民館の地域住民を対象に運動会を実施してい

る。その時には、地域住民全部で四百、五百人の所で参加は二百人余り集まり、それなりに地域が団結する機会はあるが、今はそれぐらいしかない状況になってきている。深浦という地域は漁港で、秋祭りを一生懸命やるとこであるが秋祭りが今は成り立たないような、神輿の担ぎ手だとかはどこも困っているのが現状ではないかと思う。深浦のお祭りといえば櫓にタイヤを付けずにみんなが担ぐという所だったが、とうとう櫓にタイヤが付いて引っ張って回るような状況になっている。こういった状況の中公民館としてどうしていくべきかいうのが自分なりに公民館と地域の関係性について改善を試みている。地域は地域としてやっていけるような、人数が減っていても何でもやっていけるような形に改善しないかと私の方から投げかけているが、ただ、地域としては変わるのが怖いようで私が解決策として飛び込んでいってしまったので受け入れてもらえない状況にある。公民館としての関わり方を今後変えていく必要があるというのが、学校との協働についても関わってくると思うが、今から変えていくような公民館はないか。

○西条市国安公民館　主任主事　寺町　恭三

私のところは、校区四千人程でこの十年二十年で子どもが減って四百人くらいいた子が今は一八六人、来年は十人くらい減るような所だが、学校との関わり合いということでは運動会であったり、子ども相撲大会といろいろあるが、先ほど伊予市中央公民館の話にもあったが愛護班という言葉があったが、百八十人いたら学校の保護者は二人家庭でも九十人百人くらいで、保護者が減っていく中でＰＴＡや、愛護班の役員は必要であったり役員ばかりで役員選びが大変な状態で、そういう中で国安公民館には七つの地区があり、その中で二つの地区の愛護班が危機的状況で、愛護班が無くなれば運動会の人集めもできない、子ども相撲大会の人集めもできない、盆踊りもできないというような、愛護班に全て負担がいっているような状況なので、この十一月に愛護班、小学生の子どもの保護者と各地区の自治会長を集めて何が問題なのか、今からどういうふうにしなければ西条市が協働のまちづくりをテーマの一つに揚げているが、その協働ということができなくなっている。お互いに自治会と愛護班、保護者と自治会と上手く話し合いができていない、お互いの困難さがわかっていない、というところで十一月に初めてそういう会を開いてお互い理解し合い、どこが難しいのか、お互い何が助け合えるのか、まずはそういう厳しさが見えてきたので話し合いを急遽始めようという状況である。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

地域との話し合いの場、公民館の運営審議会には当然地域代表が入っているが、愛南町の常識でいえば、合同運動会があり学校の先生にも運営審議会に入っていただいて、公民館事業として合同運動会を実施している。運動会というのは学校単位で行われていると思うが、大きい学校でも学校と合同で実施するという予定のところはあるか。

○新居浜市立大生院公民館　館長　松本　彰

まずは、人集め、資金集めが頭の痛いところである。子どもは段々少なくなっていくし、大人も以前は五十五歳五十六歳で定年を迎えて、まだまだ元気で地域にお世話を頂いた。それが最近は国の方で六十歳どころか六十五歳、場合によっては最近は七十五歳まで働くというような、七十五歳過ぎてしまうと地域のために働くというような体力も気力もなくなっているといったような世の中になりつつあるので、後継者は益々育たなくなっているところが現状である。三週間くらい前に新居浜市社会福祉協議会が愛南町の方で公民館へ見学させていただいた。その時に、なるほど良いことだなということを聞いた。それは、何が問題なのかを分かるようにするには何をすればいいのかという話で、社会福祉協議会を中心にみんなで集まって話し合いをした。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

足元をしっかり見て、出来ることからやって行くということだと思う。深浦公民館では、昔のままでやろうとするから出来ない。それを出来ることに変えませんか、出来ることをしませんか、という提案をしてもなかったし受け入れてもらえない。それはお祭

りに関することだが、何をどうしていいのか自分でもわからないが、出来ることを出来るように自分たちで判断して、自分たちで出来るような形に変えていくようにすることが一番良い方法ではないかと思う。今の現状をしっかり確認した上で、現状で出来る形に変えていくという方向で、自分なりに考えて改革を進め変えていこうとしている。

今回の分科会テーマは「学校との連携・協働」ということで、自分のところの公民館が、学校と連携が取れているということがあればお聞きしたい。

○新居浜市立泉川公民館　館長　真鍋　智明

先程も話が出ていたが、先生も忙しいから、また子どもたちも学校が忙しいからと言われたが本当にそうなのか、関心のある内容かどうか、関心のある内容であれば違ってくるのではないか。最初から、忙しいからとこられると先に進まないのではないかと思っている。良い事例ではないが私が今年感動したのは、公民館では運動会と文化祭は当然行うんですが、本当に小さな自治会が、盛大に運動会と文化祭をしている。行ってみたら、ゴールデンウィークに運動会をしている。お年寄りばかりだが、その時はお子さんやお孫さんとかみんな集まって、当然やるんだ。という雰囲気をつくって、小さな所なのに子どもは二十人くらいしかいないのに百人くらい集まってくるようなそういう運動会というようなことで、人は少なくてもいろんなことを考えてやっていけば、そういうものが出来るんではないかな。というようなことで感動しました。そこは、相撲大会もするし、来月文化祭を行うが公民館へ、来月そこの地域は文化祭をするのでパネルを貸してほしい。というようなことで取りに来る。小さくてもそれなりのことは出来ている所がある、というようなことを紹介させていただいた。

○愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典

みなさんにお聞きしたい。ほとんどの学校がコミュニティスクールを始めていると思う。それに公民館もおそらく係わっていると思うが、そのコミュニティスクールの中で公民館が連携・協働しているというような事例があれば教えてほしい。

○新居浜市立垣生公民館　主事　高橋　習子

コミュニティスクールの話なので、伊予市さんとか西条市さんはどうなのか後で伺おうと思っていた。私たちの校区はコミュニティスクールが今年で三年目になっていて、活動も多分多い方ではないかと思っている。例えば、学校支援に取り組む時から継続しているものがコミュニティスクールになってより強化アップされたという感じで、農業体験教室、例えばさつまいもやじゃがいも、出来たさつまいもを収穫してのさつまいもパーティーだとか、田植えや稲刈りといった農業体験全般をしている。明後日は、私たちの校区にカゲヤマという小さな百メートルくらいの山があり、そこの展望台にチューリップを植えたり綺麗に清掃しているので、そこまでの道を清掃する遊歩道整備事業を年二回行っていて、春は総体の関係があるので中学校は参加してもらえないから小学生と保護者それに地域の方で総勢二百名くらいで清掃をしている。明後日、秋の部は中学生が入ってくれて百九十名くらいで清掃を行う。

伊予市さんと西条市さんの、コミュニティスクールを何校されてるか参考にお聞きしたい。ちなみに新居浜は来年度から全市あげてコミュニティスクールになる予定。

○新居浜市立泉川公民館　館長　真鍋　智明

私の所も三年目。コミュニティスクールの行事に公民館は毎回出ていろんな活動に参加している。学校に新しく来られた校長先生に聞くと、しょっちゅう地域の方が来られて驚いている。と嬉しそうに話してくれる。なぜかというと地域の人はみんな応援するということで学校の方は地域の方が来られても嫌がらない。今度は逆に、学校の方に子どものことでお願いに行っても協力してくれるそれが連携だと思っている。

○新居浜市立大生院公民館　館長　松本　彰

小学校のこういう学校支援など学校行事に協力することは二十何年前からしている。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

今後こうしたらというようなところがあったらお聞きしたい。

○新居浜市立垣生公民館　主事　高橋　習子

コミュニティスクールで一番感じたのは、今までも同じような農業体験したり遊歩道整備とかあったが、参加人数が遊歩道整備は八十人くらいしかいなかったが、コミュニティスクールになった関係で、先生や保護者が来てくれるようになり、嬉しい悲鳴もあった。

○司会者　愛南町東海公民館　主事　田下　弘之

先程の平城公民館吉村館長の話に繋がると思うが、人を集めようと思ったら学校、お金は公民館というところに繋がっていると思う。

○愛南町平城公民館　館長　吉村　隆典

人や子どもたちが多い所は一杯あって羨ましい限りだと思う。うちは子どもたちが二十五名くらいで保護者がものすごく少なくて学Pが無くなった。何故かというと、毎年毎年学Pをしないといけない、という現象が起こっていて、PTAを集めるのも先生を集めるのもなかなか、公民館が事業をすると人が集まらない。今三回コミュニティスクールをすると思われるが、これはあくまでも学校の授業であって、そのために学校はどこへでも顔を出します。今私が最初に申したのは、今まで当たり前のようにできていたことが当たり前でなくなってきている状況が出ている。ですから、それを今までのように明らかにして、人は学校が集める。お金は公民館が出すよ。協力は地区がしますよ。それで最終的には地区を盛り上げる。学校を必ず存続させるという思いが、公民館でなければいけない。新しい組織を、新しくはないかもしれないが意識の中で新しい組織を作り上げていけたらというのが、私の今後の願いである。

5　指導・助言

○新居浜市立角野公民館　館長　横山 泰茂

私は公民館四年目で、ご助言ご指導までいかないと思うが時間努めさせていただく。

この度は、第四分科会をご贔屓いただき、たくさんの皆さんにご参加いただき感謝する。

最初から失礼だが、資料の一番後ろにロゴマークみたいなものがあるが、このマークを知っている方はいるか。多分公民館のマークだと思うが中身も良くわからないのでご存知の方がいれば。では、もう一つ質問、資料の今回の研究の趣旨のところ、一ページの趣旨の二行目後ろの方、IoTと書いているが読み方も意味もさっぱり分からない。雰囲気的には分かるが、どなたか分かる方はいるか。

A　IoTは、モノインターネット　Internet　of　Thingsの略だったと思うが、インターネットというとパソコンとかスマートフォンとか人が操作する物をイメージしがちだと思うが、例えば洗濯機だったり、クーラー、テレビ、自動車あるいは時計だったり色々な物にチップが埋め込まれて、人が操作する物ばかりではなくあらゆる物がインターネットを使って情報交換をする。そういう状況がすでに始まっている。AIの方は、Artificial　Intelligence　人工知能。

分かったような気がする。今からはインターネットが進歩して、車とか時計とか身の回りの全てがインターネットばっかり、お買い物もお支払いもインターネットとかいう話もあるが、そんな時代になっている。

それでは本題に入る。発表の流れ的にレジュメの方は、地区の概要、主題、事例、成果と課題ということで、流れを上手にまとめていただいている。というのも、一の地域の概要については先程から話に出ているとおり、私たちの活動は地域無くしては進めないというところがあるので、概要を入れていただいたのは大変良かった。それから、私たちの校区とか地区を色々比べることもでき、大変重要な内容ではないかと思う。次の事例については、二館とも地区の実態を踏まえて大変分かりやすかった。特に主題については、先ほどの校区の概要のところにも含まれていることもあるが、主題等しっかりつかまえて発表していただいた。両館まとめると、一つは公民活動は長年に渡って花火的なものではなく、今日の発表も十年を越して継続しているものがあった。楠河公民館では放課後教室、伊予市中央公民館ではサポート教室とい

うようなことで、着実に進めていることが素晴らしい。公民館については戦後にできて五十年くらいだが、学校教育については百五十年くらい経っていると思う。公民館にはいくら長くても戦後なのでその半分くらいということで、二館の特色と館の活動を長年こつこつと、今十年越したから、今の素晴らしい活動を二十年三十年と続けられるようにしてもらいたい。

もう一つは、地域の人的物的、それから自然環境というようなものを活かした活動をしている。先程も言ったが、私たちの活動は地域の自然や人なくしては活動できない。こちらも今日の発表の前に資料、プレゼンの方には着実に地域の特徴特色を出して活動を進めているので素晴らしい。特に先程、読み方のことで質問したが、無人島のこととかカブトガニとか、全体地域に無くしてはならないアピールポイントの先端になる。是非続けていって欲しい。人的なものもどちらの館も視野を広げるために、人集めのためにあらゆる各種団体から参加を呼び掛けていく大変素晴らしい活動だと思う。

それから、企業の事がポツポツ出ていたが、企業参加のこういう特色のある地域の活動が大変良かった。地域の環境、人的物的を利用した活動推進は大変素晴らしかったので、是非続けていって欲しいと思う。最初に言ったが、長年に渡り、コツコツと一年ずつ積み重ねていって欲しい。もう一つは地域の特色は絶対に出して欲しいと思う。

ということで、活動推進について、両館とも大変良かったと思う。最後に課題と効果、効果については今言ったとおり上手くいっている。課題についても、ちゃんとまとめていただいた。少子化の課題、また情報の共有がまだ広がっていない、人集めもまだそういった意味で少ないというのが課題。それから、後継者の問題が残っているところだと思うが、どの館も同じではないかと思っている。というとこで、課題の中で新しい課題として今日の分科会Dで先程出ていた、コミュニティスクールの方も成果醜聞にこれからも誇示しながら、十分に発展又は進化していくのではないかと思っている。

ということで、分科会の助言指導にもならないと思うが、一応私の感想ということで話したところである。

最後、宿題を出したいと思う。宿題は先ほど言ったロゴマークの意味を調べてほしい。できたらロゴマークの輪のところも調べて欲しい。

先程も言ったが、私は館長四年目で深く専門的な話はできないので、今日にあたってこの本はご存知だろうか。（全国公民館連合会　編著『新訂　よくわかる公民館の仕事』　平成二十九年　第一法規株式会社）この中の一部を話したいと思う。館長の話、もう一つは主事、主事補への話がこの中に出ているので、少しだけ話す。

『新訂　よくわかる公民館の仕事』

第1章　公民館入門　1－5　館長について

1　館長―館の責任者という役割―

館長は、事業の企画・実施および公民館経営の責任者であり、所属職員を監督する立場にあります。日常的に利用される施設の責任者ですから、常時、その場にあるように計画される必要があります。つまり館長は、「常勤」であり「専任」であることが求められます。それなしには、責任者としての役割が果たせない結果になりかねないからです。

しかも、公民館は教育機関ですから、館長は教育機関の責任者ということになります。館長が教育についてあまりよくわかってないというのであれば、責任を全うすることは困難になります。

学校の校長先生は、学校という教育機関の責任者ですから、教育についての識見が当然求められています。しかも常勤の専任職でなければ勤まらない職種ということです。それと同じことが公民館長にもいえます。

社会教育法第27条第2項に「公民館の行う各種の事業の企画実施その他必要な事務を行い、所属職員を監督する」とありますが、直接に事業の実施にあたるのは公民館職員ですから、館長の

職のあり方、この公民館職員の職務上の後ろ楯ということになりましょう。この職種は、一般職員と異なる勤務体系なので、職員の労働条件について配慮することが館長には求められます。また、少ない職場であっても職員の意見をまとめて職場集団づくりをしていくことも重要な役割と考えられます。

ところが、館長の現状は、なかなかそういう本来のあり方からかけ離れた理想論だというところがあります。それは次のようなことに関連しています。

2　公民館長の立場

実は公民館長は、非常勤職が多いという実態があります。館長が常勤専任で配置されている割合は、全体からみれば少ないのです。非常勤にもいろいろあり、非常勤というものの常勤的に勤務する館長のケースがあります。その反対に月にわずか顔を見せる程度という非常勤館長もあります。この非常勤館長とは別に、兼務の館長という人もいて、教育委員会の社会教育課の課長、あるいは教育長が兼務している場合もあります。この場合は別のところで専任の職をもつ常勤の一般職です。

この兼任のケースも含めて、常勤、専任館長はとうぜん公務員です。しかし、非常勤・嘱託館長は地方公務員法第3条の第3項第3号に該当する特別職に該当いたします。つまり、公務員ではありません。したがって、常勤的に勤務している非常勤の館長も特別職ということになります。

（全国公民館連合会　編著『新訂　よくわかる公民館の仕事』平成二十九年　第一法規株式会社　P78～79）

もう一つ面白いところがあったので、最後一分だけ。

4「公民館のあるべき姿と今日的指標」の館長論

(1)　館長の身分

①　本館には常勤・専任の館長を必置すること。

②　館長となることのできる者は、社会教育主事と同等もしくはそれ以上の資格をもち、社会教育職員としての勤務経験5年以上の者とすること。

特殊の事情によりやむを得ない場合は、教育的識見その他において優秀な人材を館長とする方途を別に考慮するものとする。

③　館長は、教育公務員特例法第1条第5項にいう専門的教育職員とすること。

④　館長は、広域間の交流ができるよう考慮すること。

(2)　館長の給与

館長の給与は、公立義務教育学校の校長と同等以上とすること。

さらに、「館長の職務内容」に言及していますが、発表当時は、単なる理想論として受け止められた面もありました。それから40年経過しましたが、決して館長制度が深められてきたとはいえません。この特集を機会に館長のあり方が議論され、議論が重ねられることを期待しています。

（全国公民館連合会　編著『新訂　よくわかる公民館の仕事』平成二十九年　第一法規株式会社　P80～81）

と記載されている。発行されて一年とちょっとしか経っていない。主事と主事補のこともこの中に出ているが、時間が来ているので読むのは宿題としたい。

分科会E「伝統・文化の継承」

1　発表要旨

○内子町立小田自治センター　館長　上山　淳一

「臼杵地区における伝統・文化の継承への取り組み」

1　臼杵地区の概要

2　プロジェクトの背景

3　伝統・文化継承プロジェクト

(1)　三島神社のおねり・獅子舞の復活継承

(2)　生活文化の調査

4　プロジェクトが終わったその後

5　おわりに

○今治市玉川公民館　館長　菊川　満朝

「今、こどもに伝えたい文化　ふるさと探検　伝々」

1　玉川地区の概要

2　伝承文化事業開始のキッカケ

3　玉川公民館の協力組織について

4　伝々の各事業について

(1)　玉川ふるさとカルタを作って遊ぼう

(2)　玉川の身近な野鳥観察会と七草粥

(3)　昔ながらの餅つきと大型紙芝居

(4)　ピザ釜とピザ作り

(5)　山里に住む川の達人と投網で鮎捕り体験

5　今後の課題

6　おわりに

2　質疑応答

Q　松前町東公民館　公民館主事　東山　伸也

臼杵地区についてお聞きしたい。私は、北伊予の神崎（かんざき）というところに住んでおり、地元の神輿に長年参加している。年々神輿の担ぎ手が減っており、台車を使用して行っている。中学生も祭りを楽しんでいるようでは無く、やらされている感があるので、来年からどのようにしたらよいかということを、神輿を一緒にしている先輩達と話し合いをしている。このような時に今回の事例発表のように文化継承への取り組みについてお聞きすることができた。

事例発表の中で獅子舞復活に関して町長さんに相談が持ちかけられたことから始まったとあるが、おねり・獅子舞プロジェクトを立ち上げられた時の苦労されたことは何か。

A　内子町立小田自治センター　館長　上山　淳一

長く臼杵地区では、おねりを長期間、披露していなかった。代わりに子供たちが、学校の学習で教えてもらって奉納している。地域の中では、覚えている方は高齢となり、このままでは失われていくという気持ちがあり、伝統ある行事を残したいという思いが強かった。

地域から、町長に対し、行政でなんとかテコ入れしてくれないかという話があって、このことに町長が答え、以前から、内子のフィルドワークに携わっていただいた愛媛大学の井口先生にお願いしたら、何とかしていただけるのではないか、ということになった。地元では、小学生や地元の方に教えて長くやってもらいたいという気持ちがあったが、小学校は、廃校になってしまい、地元では誰もすることができなくなっていたので、地元の人の気持ちとは違うことになったが、大学生にお願いして、携わっていただくことになった。先ほどの発表した中でもあったが、地域外の人ですから、大学生が来なくなったら終わり、継続はできなくなる。大学生にお願いしても、意味がないのではないか。という意見もあったが大学生に熱心に三年間、関わっていただきました。地域の一員として頑張りたいという大学生の取り組みが、地域の方の気持ちを変えた。これだけ頑張っていただくのだから、学生の気持ちに答えたい。地元でも、獅子舞をしてくれる若者がいない。「地区外に出ている人」を先ほど「他出子」（たしゅつし）言いましたが地元出身で地域外にいる方にこの思いを伝えて協力してもらえないかと伝えたときにそれに答えてくれる若者がいて、週二回、松山に住んでいるが、帰ってきて、獅子舞をやってくれるようになった。高齢化、過疎化となり、地域の担い手がいなくなるところには、地元出身で地域外に出た方に呼びかけて協力をいただく。他出子の協力が必要となっていることが重要にとなっている。

Q　松前町東公民館　公民館主事　東山　伸也

もう一つ今治市玉川公民館　菊川さんにお聞きしたい。

永遠の課題は、子育て世代二十代から五十代は、なかなか公民館には、来ていただけない。何か努力をされているか。

A　今治市玉川公民館　館長　菊川　満朝

実は、公民館には、ＮＰＯ団体とか各種団体があり、これをまとめるコーディネーターが一人いる。この方が各団体・学校に連絡をとって対応できる形をとっており、割と簡単にやってくれて

いる。本日もコーディネーターが会場に来ているので、説明をお願いしたい。

A　今治市玉川公民館　事務職員　渡部　妙子

以前は、小学生などにあがる保育園児ぐらいしか、公民館に足を運んでくれる子がいなかった。青少年などこれからだんだん大きくなってそのうち玉川を担ってくれる子どもたちもどうにかして育てたいということで、館長が発表しましたボランティアグループ玉川の人たちが協力して、この伝々の会を立ち上げてくれた。子どもさんたちは、伝々を始めた当初は、人数も二十人ぐらいで少なかった。目が行き届く範囲では、三十人ぐらいが一番いいと思っていたが、現在は、四十人、五十人と多くなってきている。本来は、五十人は、見切れないので、三十人ということで募集をかけるが、お願いしている学校が二校あるので、三十人という制限は掛けさせていただいているが、両方から出てきた場合、申し込んでいる子どもを断ることができないので、全員受け入れている。今は、町内だけではなく、今治市内のお母さんたちも噂を聞いて参加をして下さっている。人集めの苦労は、最初は大変だったが、現在は、問題ない。

Q　砥部町青少年育成センター補導員　佐伯　修二

上山さんにご質問をさせていただきます。私、砥部町でも広田地域臼杵の隣の出身です。

臼杵に伝わった元の篠谷の獅子舞は昭和六十年と思いますが、やまっております。言われるように過疎化・高齢化が進んで維持ができなくなっている。それでもし復活するようなことがあれば、臼杵の方に教えていただきたい。その時は、よろしくお願いしたい。それで、ご質問ですが、大学の学生さんが、獅子舞を復活させてくれた。そのあと地域の他出子を含めて地域に伝承できるようになったと聞いた。大変なご苦労があったと思うが、今後広田地域もそうですが、ますます過疎化・高齢化が進んでくると思われる。特にこれといった特効薬がないと思うが、先ほどの他出子、その人の子どもさん、そしてお孫さんと継承していく必要があるが、その現状の課題と継承していく努力をどうしているか教えていただきたい。

A　内子町立小田自治センター　館長　上山　淳一

私が今考えているのは、過疎化が進む地域で地域の担い手を確保していくためには、今の子どもたちにしっかりとしたふるさと教育を受けさして郷土豊かな子どもに育ってもらう。将来大人になった時に地元にいなくても、他地域からでも地元・ふるさとを応援してくれる子どもを育成していく必要がある。今やっているのは、去年から始めたが、地元の小学校の子どもたちに文化財巡りをさせている。地域にある巨木や神社、天然記念物に指定されているような地域とか、今年は、山城も周ったが、地域の色々な素晴らしい文化財があることを知ってもらう。地域に愛着を持ってもらう。そのために地域の高齢者の方が先生になって子どもたちに話してもらう。

そういったことによって、子どもたちは、教室で先生から教えてもらうだけでなく、五感を使って郊外で学ぶことで脳に刺激を与えていい学習になるのではないか。ふるさと教育というものを学校と一緒に取り組んでいる。

今年は、井口先生にお願いし、小学校三年生の児童に古民具を使って昔の暮らしについて学生と一緒に勉強させた。地域のことを学習させることによって、地域に愛着をもって育ってくれると思っている。

地域の行事ができなくなっているという事例があって、地区外に出られた方に呼び掛けて、応援団を作っているところがある。南山という地区でここも人口が六十人ぐらいしかいなく、高齢化率が七十％という地域で地域の方も高齢となりイベントをしても協力者が集まらないようなところである。そのため応援団として地区外に出られている方三十人ぐらいに登録してもらい、地元の方三十人と合せてスタッフ六十人ぐらいで山菜祭というイベントをしているが地区外から三百人ぐらいお客さんが来る。そのように応援団による組織づくりも一つの方法かと思っている。

3

分科会テーマに対する研究協議

○松前町公民館運営審議会　委員　丸田　力

先ほどの意見交換の中で話したらよかったが、お二人方にお伺いしたいことを感想と含めて述べさせていただく。

まず小田自治センターの上山さんにお尋ねしたい。資料を見ると人口が七十五人、高齢化比率が六十九・三％とものすごく高い。その中でこういった活動ができて素晴らしいと思うが、先ほどもご質問があったが、愛大に協力をお願いしたというのはどなたの発想ですか。私は、発想が素晴らしいと思う。これだけの人数で高齢者も多く、その中で文化の継承を取り組むことは非常に難しい。それをこのような形で、今も続けておられるということは、すごいことと思う。普通考えるとこの地域は、年寄しかいない。若い人はいない。これはだめだと思うのが普通だが、これを乗り越えて残っている。人口の構成比を、見ると二十から三十代の若い男性がこの地域にはいない。これができるということは、「愛大生にお願いする」、「地元出身の若い方が戻ってきたときに動いてもらう」こういう考えがあったからできたのではないかと思う。獅子舞にしましても　周りの地域も巻き込んでしたことは素晴らしいと思う。特に質問ということではありませんが申し上げておく。

○内子町立小田自治センター　館長　上山　淳一

学生への依頼について誰の発案か。という話があったが、これは、臼杵地区から町長に話があり、町長から、今教育長をしている井上というものが、当時は自治・学習課の課長であったが、以前から井口先生を知っている井上に、井口先生にお願いしたらなんとかなるのではないか。お願いしてみてこいとの話があった。井口先生は、獅子舞の復活をお願いする以前から、内子に来てもらっていたため、つながりはあった。現状を伝えたが、最初、これは学生が取り組むべきものではないとの考えも持たれており、地元が取り組むべきものと井口先生は思っていたが、地元の熱意に押され、考えが変わり、できる限り協力するという話をいただいて始まった。

それから高齢化はすごく、本当に地域に担い手はいない。

臼杵のあるところは田渡（たど）地区というところになるが、何年か前からお祭りも四つの神社があり、それぞれにお祭りが毎年十月二十九日にやっていたが、担い手はいなかった。この時、祭をどうするかと話があり、日曜日だったら、地区外に出ている人が帰ることができるということで、四地区の自治会があわせて日曜日に変更した。

十月の最後の日曜日に変えてでも、祭りをやっていこうと変えた。

今このように日曜日にしたため、地区外から帰ってきてくれてお祭りをやっていただいている。

○松前町公民館運営審議会　委員　丸田　力

玉川町の取り組みの中で資料最後の「おわりに」というところに書いてあるコーディネーターがある。先程もコーディネーターの方のお話を聞かせていただいたが、実際に必要だと思う。学校、公民館とボランティアを結びつけるのが、コーディネーターだと思う。私も、今はしていませんが、ボランティア連絡協議会の会長をずっとしていた。いろいろな活動を活発化するためには、会の事務局が中心となってコーディネーターの代わりをすることにより、グループが生まれたり、活動が広がったりしていくのを見てきた。これから一人でなくてもいいと思うので新しいアイディアを取り入れられてますますよくなると感じた。

○司会者　松前町東公民館　館長　栗田　眞吾

丸田さんからも、高齢化率の話がでたが、いまここで調べると臼杵地区が六十九・三％、玉川町の高齢化率が三十八・六％。ちなみにこの数字を見たときに松前町で調べたら三十・一％だった。高齢化率とは、皆様ご存知のとおり六十五歳以上の総人口に対する比率だが、もう一つ調べると、国際連合の定義で総人口六十五歳以上の総人口に対する比率が七％に到達すると高齢化となるらしい。七の倍数で覚えたらいいと福祉関係者から教えていただいたことがあるが、十四％だと高齢化の化がのいて高齢社会となる。その次の二十一％になると超高齢社会、今、松前町の三十・一％は高齢社会、超高齢社会を飛び越えている。もう一つ、日本の高齢化率はいくらかと調べたら、二十七％。世界のランキングでナ

ンバーワン。二百の国のナンバーワンが日本という状態になっていると知り、そんなに高いのかと。一桁のところはないのかと調べたら、十億からいるインドが六・九％、フィリピンが四・九％。一桁の国は、いくらでもいる。そういったことを踏まえて今の日本の四国の愛媛の中の実態というものを思い浮かべながら、再度、伝統文化の伝承への取り組みというものを考えてみてはどうか。

本来であれば最後に助言者の意見を聞かしていただくが、途中経過ということで羽田さんから今までの経緯経過を振り返っていただき意見を述べていただきたい。

○助言者　四国中央市天満公民館　館長　秦　英治郎

私は、四国中央市の土居町で天満地域という所に住んでいるが、ここにも「二絃琴」（にげんきん）というものが発祥の地とされている。五十～六十センチの琴だが、これの伝承をしていかなければいけないということで、公民館として小学生の四年生以上を対象にして八雲琴（やぐもごと）伝承教室ずっと昨年度までは、続けていた。今年度になって子供が二人になり、一人が用事で来れない場合は、一人では、今の小学生は、来づらくなる。琴をやろうかと言っていた子も一歩引いたような形になってしまい、今は、少し休止状態となっている。私どもの小学校では、部活動としても琴をしておりますので、何人かはしている。公民館祭であったり、敬老会であったりと発表の場を設けてそれで演奏をしてはくれている。このように公民館の伝承教室やってきたが、来年度からどうしていくか。学校にも呼びかけ、先生にも呼びかけをしているが、最近の子供たちは、部活やスポ少があり、色々とする事が多くてなかなか参加してくれないのが現状と思っている。校区を広げて実施してみようと私の頭の中にはあるが、何とかして、今まで引き継いできた伝統を繋げていきたいと今問題に直面している状態である。このように愛媛県各地で伝統文化が地区にもあろうかと思うが、やまって何年かになるとか、どのような形で立ち上げていったとかあると思うので、この場で参考のために皆さんにお教え願えたらと思う。

○砥部町青少年育成センター補導員　佐伯　修二

特殊なケースになるかもしれないが、伝統文化の復活した事例として発表をさせていただく。先ほど言いましたように広田地域に高市（たかいち）という地域があるが、正確な資料を持っていませんが、人口が約百人前後と思う。高齢化率は、臼杵地区と同じぐらいの高齢化率と思う。

そこに秋祭りの時に神輿二体、獅子舞二頭、先導役の「舎義利」（しゃぎり）というものがある。お練りであるがそれも何年も休んでいた。平成四年に高市小学校に通っていただく児童を全国から募集した。山村留学センターを平成四年に導入することによってやまっていた「舎義利」を復活することができた。「舎義利」には、子どもが二十人ぐらいいる。鉦（かね）、太鼓もあるし、猿とか、だいばんとかいろいろあるが山村留学を導入することによって、現在も続いている。現在、山村入学生は、十六人で地元の高市の子がたぶん二人と思う。

○司会者　松前町東公民館　館長　栗田　眞吾

内子町自治センターの上山さんより「他出子」という普段は、聞きなれない言葉が出てきたが、地元出身で地区外に出た人に協力を求めるということで、何年か前にテレビで見たが、新居浜の太鼓台や西条のだんじりは、東京にいても松山にいても必ずその祭になったら地元にもどって担ぐと聞く。

そこまで有名になると何もしなくても、若い者たちは必ず太鼓台・だんじりに思いを寄せて遠く離れた東京からでも帰ってくるような形になるというが、小さな文化伝統にしても他の力をかりて絶やさぬようにしていくことは貴重なことではないか大事なことではないか。そのためには、このようなことをやっていると情報発信も必要ではないかと思う。日本的、世界的にメジャーになっているものはいいのですが、風前の灯であるものをなんとか地元の熱意で絶やさずにしている苦労などあれば、お話し頂きたい。

○今治市社会教育課　日高公民館　髙橋　智子

玉川公民館の活動として　ピザ窯、ピザ作り、投網体験など故郷に目を向けたすごくいいイベントと思う。子どもを持つ親としてはすごくお金を払ってでも体験させてあげたい企画だと思う。

そこで質問ですが、アナウンスはどの範囲で配信しているかをお訪ねしたいということ。またコーディネーターさんが一名いらっしゃるということだが、どういう経緯でコーディネーターが誕生して、また新しいコーディネーターさんの育成を視野に入れて考えていくということですが、どういう取り組みをしているのか教えてほしい。

○今治市玉川公民館　館長　菊川　満朝

　コーディネーターは、公民館の職員にしていただいている。昔から玉川町内に住んでおり、全部知っているような方。任せていたら誰にも声をかけていただく。すぐに困った時はこの人。携帯電話には、何人入っているかわからないが、すぐに連絡して、行事に結び付けてくれる。

○今治市玉川公民館　事務職員　渡部　妙子

　伝々の募集の仕方は、町内に学校が二校あるのですが、そこに依頼している。土日のお休みの日は、子どもたちは、少年野球であったり、バレーであったりとスポーツをされていることが多いというので、長期休みの平日であれば子どもたちも空いているのではないかということになった。長期休みは、一か月半ぐらいあるので、夏休みに二回、冬休みに一回で計三回、年度初めに計画を立てさせていただいている。三回の学習内容と負担金などすべて申込書に載せさせていただいて募集をしている。子どもたちも学校を通して、公民館にまとめて申し込みをしてもらっている。年間を通して申し込みをしている子には、公民館からその時期になると詳しい内容の案内を出させていただいて、欠席の場合のみ公民館に連絡してもらうこととしている。

○今治市玉川公民館　館長　菊川　満朝

　それからコーディネーターの発掘ですが、新聞社の方と連絡を取って携帯電話を通して話をしてもらって、公募もしっかりやってもらっている。ＦＭラジオ放送なども利用して発信していただいている。コーディネーターも新しい方を入れていかなければいけないが難しいところがある。

○松前町東公民館　公民館主事　東山　伸也

　玉川町さんにご相談なのですが、今年西日本では、猛暑日が続いたのですが、子どもさんを集めるに当たって熱中症対策はどのようにされていたか。

○今治市玉川公民館　館長　菊川　満朝

　確かに今年は暑かったのですが、玉川町は標高が高いところなので涼しい。

　ピザ窯の所は、木が生い茂っており日陰になって割と涼しい。水ヶ峠トンネルのすぐ近くなので、標高が一番高いところで、日陰になっており、横に川が流れ、割と夏でも、長袖がいるぐらいであるため大丈夫である。

○司会者　松前町東公民館　館長　栗田　眞吾

　県の公民館のメイン会場は久万高原町ということで、分科会に久万町の方がいるかどうかわからないが、今年の八月二十五日の愛媛新聞に掲載されていた記事で、この地に伝承を進めている久万高原町まちづくり塾の聞き取り活動という記事が載っていた。その中でまちづくり研究会グループ久万高原町塾の藤目さんという塾長が若い世代に興味を持ってもらおうと開催し、失われつつある知識を記録しようと二〇一四年二月に発足したと載っていた。地域文化の伝承等、難しくなりつつあるものを町内でなんとか記録として残せないか。その中に久万町内で昔は蜂の子入りのご飯をふるまわれていた。それがコミュニケーションツールだった。それがだんだん失われつつある。蜂の子入りのご飯を作っていたという食文化も一つの文化でもあるため、残していこうということが、今年の八月に愛媛新聞に出ていた。今回、県公民館研究大会の会場が久万ということで、そういったことを、久万の人から聞けたらなあと思った。私は久万の人を知らないので、手を挙げていただいて、そういったことをお話聞かせていただければと思う。

○久万高原町中央公民館　主任　中川　昌美

　先ほど栗田さんから、新聞記事を見せていただいて、その取り組みを行っているのはここからもう一つ山を越えていった畑野川地区というところだが、今かかしの里コンクールをやっており、

今週末、収穫祭も行われるようになっているので、ぜひお越しになっていただきたい。その地域で藤目先生自体は、数年前に町おこし、まちづくり専門の愛大の名誉教授の先生でしたが、久万高原町に移住して、町を元気にしようということでいろいろな活動をしていただいている先生である。食文化の伝承なんかにも取り組んでいるということを失礼ながら本日お聞きした次第であったが、昆虫食、蜂の子、イナゴの佃煮とかこういう文化は久万にはある。田舎の方に行くとまだ残っているところもあり、蜂の巣があるよという情報があったら殺さずにそのままにしておいてくれと取りに来る人もいる。それで、報酬は取らず、蜂の子がほしいということで、結構貴重なものである。そういった文化をどのように伝承していくか。公民館での取り組みは聞いたことがないが、親から子へ子から地域へと廻しながら、伝承していっているのではないかと思う。しかし、少子高齢化がとても進んでいるのでなかなか難しい。

最近の若い子やお母さん方は、蜂とかは、触るのも見るのも嫌という方も多いと思うので、そこで子どもが蜂取ってきたよと言っても多分受け入れていただかない。そこでおじいちゃん、おばあちゃんと子どもたちを交流させていく仕組みを作るか、愛大など学生さんとの連携を図るなどのアイデアもあると思うので、これから勉強していく。

4

指導・助言

○助言者　四国中央市天満公民館　館長　秦　英治郎

お疲れ様です。本日は、内子町臼杵地区と今治市玉川地区の取り組み活動を発表していただいて、自分の頭の中にイメージしながら聞きいていたが、どちらも大変な苦労があったのだろうなと思うと共に、地域の人たちの熱意を感じた。このように素晴らしい取り組み活動について助言をするような立場ではないが、私なりの感想として聞いていただければと思う。

まず、内子町臼杵地区における三島神社のおねり・獅子舞の復活継承についてであるが、臼杵地区の三島神社をグーグルマップで調べてみますと、銅板葺の立派な社殿で伝統ある神社であるのだなと拝見した。

そこに奉納するおねりと獅子舞が高齢化と後継者不足により、継承が困難になり、なんとか地元の小学校で演じられてきた、おねりも小学校が廃校になったため継続が出来なくなり地域の人たちにとっては大変な事態となったわけですが、ここからの地域の人たちの熱意、そして行政を巻き込み、愛媛大学の准教授へ協力のお願いに行く、この行動力も凄いなと思った。

その熱意が伝わり、平成二十五年から、おねりと獅子舞復活プロジェクトがスタートしたようだが、ここからが本番だったのだと思った。

獅子舞では、十人の演者等がどうしても必要で、演目は二時間三十分も要するとの事であったが、このような獅子舞は全国的にも非常に珍しいものではないかと思った。また、おねりも役者が十人も必要で昔行われていた焼畑農業を、お芝居で再現し伝えるというユニークな伝承方法だと思った。それを、初めての学生に指導するということは、相当の労力と時間を準備に費やしたことと思う。

そして、臼杵と松山を往復しながら練習を重ね、二十六年十月の秋季例大祭に、約三十年ぶりに「おねり」が奉納され、アドリブも入れながら楽しく演じられたようだが、観ていたお客さんも楽しい時間を過ごされたと思った。

祭り当日は臼杵出身の方々も大勢帰省され、久しぶりに地域が活気にあふれ、笑顔いっぱいになった一日になり、このプロジェクトは一つの区切りとして成功に終えたのだと思った。

これを機に、生活文化の調査が行われ冊子も作成されるなど保存資料も残されたとのことですので、これからも受け継がれていくことを願っている。

また、獅子舞は若い人へ継承されることが出来、敬老会でも披露されたようですが、このように祭り以外でも発表する機会を設ければ、練習が必要となり、伝承へとつながって行くと思う。壮大なプロジェクトを短い時間で発表していただき、お疲れ様でした。

続いて、発表していただいた今治市玉川地区の「今、子どもに伝えたい文化、ふるさと探検　伝々」についてですが、日頃から小中学校の生徒と関わっていることがキッカケとなり、子どもたちに「玉川の自然や伝統文化を伝えていきたい」そんな思いで始められたようだが、費用もない中、地元の方々のご厚意で実施されたとの事。受ける側としては申し訳ない気持ちだったかもしれないが、伝える側は楽しかったと思う。そんな活動が認められ市の予算も付くようになってよかったし、地域を改めて見直すことにも繋っていることと思った。

玉川地区の活動の素晴らしいところは、年度始めに一年間の計画をきちんと、企画していることである。そうすることで、子どもたちを飽きさせない新しい発想も浮かび、毎年度実りある取り組みが実施できているのだと思う。

それが、「玉川ふるさとカルタ」や「野鳥観察会と七草粥」「餅つき、大型紙芝居」「ピザ窯とピザ作り」そして、投網で鮎捕り体験へと発展していったのだろうと思う。

地域の歴史、文化をカルタにして残す。それをホームページに載せたのはいいアイデアと思った。自然観察には同じ世界、風景がなく常に変化していることに気付くとそれを楽しく感じ、ワクワクしたのではないか。動けば当然お腹が空く、そこで弁当ではなく七草粥を食べ日本文化について学ぶ。素晴らしい結び方をしていると感心した。

また、ピザ作りは窯制作から取り組み、ピザの材料も自分たちで収穫したり地元の農家から提供してもらったりと、みんなで力を合わせて楽しみながら作り上げたピザは世界で一番美味しかったのではないでしょうか。

それから、投網で鮎捕りに挑戦は難しかったと思うが、成功した時は嬉しかったでしょうし、それを自分たちで作った炭で焼いて食べるというのは贅沢な体験だと思う。

どれも、子どもたちにとって一生の思い出に残る体験ばかりで、素晴らしい活動だと思う。

課題として先生の負担が増えているようですが、お世話する側の負担軽減も計画の中に入れて検討し、これからも、この活動を続けていけるよう頑張ってください。

最後に全体として、この様に、県下各地に残る、伝統文化は高齢化、人口減少によって継承、存続が益々難しくなっていくと思う。特に多くの人手がいる祭りなどは大変だと思った。先日開催された、私の地元の秋祭りでの太鼓台の運行も三十人くらいで行っており、「いつまで続けられるかな～」など、心配の声も聞くようになった。

各地域に伝えられてきた伝統・文化はその土地に生まれ、生活の一部として伝えられ、地域の発展に大きな役割を果たしてきたことは間違いのないことである。それを、これからの未来へ繋いで行くためには、形を変えて行くことも仕方のないことかもしれません。しかし、忘れてはいけないのは、先人たちの思いだと思う。

ＡＩが人の脳を超え、子どもたちの未来はどう変わっていくのか想像もできないが、大切なものは変わらない。どうか皆さん、それぞれの地元を大切に守り未来へと繋げて行ってほしいと思う。まとまりのない、お話を長くしてしまいましたが、これをもちまして私の言葉に代えさせて頂きます。皆様、ありがとうございました。

県公連だより

平成三十年度 愛媛県公民館連合会総会

五月十七日（木）午後、県生涯学習センターにおいて、平成三十年度総会を開催しました。

越智会長の開会挨拶に続いて、愛媛県教育委員会教育長三好伊佐夫様からご祝辞をいただいた後、議事に入りました。「平成二十九年度事業報告並びに一般会計歳入歳出決算」「平成三十年度基本方針並びに事業計画（案）」「平成三十年度一般会計歳入歳出予算（案）」「平成三十年度郡市公連会費分担金（案）」等について審議が行われ原案どおり可決されました。

また、郡市公連会長退任に伴う役員の選任が行われ、永原会長ほか、副会長二名、理事一名、監事二名が選任され、新体制がスタートしました。

平成三十年度 県公連主事部会会議

五月二十五日（金）午後、県生涯学習センターにおいて開催しました。副部会長の欠員に伴う役員の選任を行い、新たに東予・中予から二名が選任されました。

また、新居浜市で開催される「主事部会・公民館職員等合同一泊研修会」の実施内容や、次年度の開催地（中予地区）の協議のほか、主事部会研究活動の実施内容について意見交換が行われました。

平成三十年度 新任館長研修会

六月八日（金）、県生涯学習センターにおいて、新任館長を対象に開催しました。四十一名の新任館長が参加したこの研修会は、県教委社会教育課、人権教育課、県公連専門委員会若松委員の協力を得て、公民館制度や人権・同和教育についての講義や、「地域づくりと公民館活動」をテーマとした講話等、今後の公民館運営に役立つ知識を身につける有意義な研修会となりました。

平成三十年度 公民館新任職員ネットワークセミナー

六月十四日（木）・十五日（金）の二日間、愛媛県身体障がい者福祉センター及び道後友輪荘において、公民館新任職員五十名が参加し、「活力あふれる公民館をめざして」のテーマの下、公民館新任職員ネットワークセミナーを開催しました。県教委社会教育課の協力をはじめ、社会教育の実践者による講話、レクリエーション実技の指導、先輩主事とのグループ討議等、二日間にわたる充実した有意義なセミナーとなりました。

平成三十年度 県公連主事部会・公民館職員等合同一泊研修会

七月五日（木）・六日（金）の二日間、マリンパーク新居浜及び新居浜市立多喜浜公民館において、「地域づくりと公民館活動」をテーマに研修会を開催しました。研修会には二十三名の主事・公民館職員が参加し、初日は、新居浜市立多喜浜公民館において、多喜浜塩田の開発の歴史と保存伝承活動の取組みを学ぶとともに、塩づくりの体験学習を行いました。二日目は、新居浜市教育委員会・公民館主事による、公民館事業・地域学校協働・防災・地域づくりについての講話や事例発表により、新居浜市の取組みを学ぶ有意義な研修となりました。

研修実施にあたり、新居浜市教育委員会・新居浜市立多喜浜公民館・多喜浜塩田資料館建設推進委員会からの積極的なご協力をいただき、心からお礼申し上げます。

平成三十年度 第二回理事会

七月十九日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

県公連会長表彰・感謝状贈呈候補者の選考のほか、平成三十年度県公民館研究大会の運営、全国公民館研究集会徳島県大会の事例発

表や助言者等の選定、全国公民館研究集会東京大会参加募集奨励金についての協議が行われました。

平成三十年度 愛媛県図書館講習会

八月二日（木）、松前総合文化センターにおいて、県公民館連合会をはじめ六団体が共催し、図書館業務に係る講習会を開催しました。公民館職員を含む六十八名が参加し、「図書館業務のトラブル等の対応」を学ぶとともに、ビブリオバトルの実践等により、図書館業務の知識や技能の習得に努めました。

平成三十年度 公民館報コンクール審査会

八月二十三日（木）、県生涯学習センターにおいて、一部二十一点、二部二十点の応募の中から慎重に審査が行われ、入選作品に一部二部とも各七点が選考されました。

十月二十六日久万高原町での平成三十年度県公民館研究大会において、入選作品を顕彰したほか、全ての応募作品を会場内で展示・紹介しました。

石川全公連会長 西日本豪雨被災地訪問

九月五日（水）、全国公民館連合会の石川会長ほか、事務局長・次長の二名が、西日本豪雨災害による被災地三県訪問の一環として来県されました。

松山市三津浜公民館において永原会長と面談し、被災状況を把握されるとともに、永原会長に対し見舞金目録が贈呈されました。その他、被災した大洲市肱川公民館・西予市貝吹公民館・宇和島市立吉田公民館を視察され、訪問先の方々に励ましの言葉をかけられました。

全公連及び株式会社エコー総合補償サービスからいただいた見舞金については、被災地公連に配分しました。

平成三十年度 愛媛県公民館研究大会（久万高原町産業文化会館「ホール」他）

十月二十六日（金）、久万高原町産業文化会館をメイン会場に、四百七十七名の参加を得て、「これからの公民館の役割と課題とは」と題して研究大会を開催しました。

また、分科会は、久万高原町産業文化会館・久万町民館・久万中学校で優先度の高い五つのテーマで開催しました。

久万高原町教育委員会をはじめ関係各位のご協力に感謝申し上げます。なお、詳細については、本号の「平成三十年度愛媛県公民館研究大会」をご覧ください。

平成三十年度 第四十回全国公民館研究集会 東京大会

十一月一日（木）・二日（金）の二日間、「日本青年館」（東京都）において、第四十回全国公民館研究集会が開催され、全体で千四百二十名、うち、本県からは四十一名が参加しました。

研究集会では、「公民館がひらく　日本の未来～地域性・個別性を活かした新しい公民館活動を！～」をメインテーマに、初日は、池上彰氏の記念講演やパネルディスカッション・情報交換会、二日目は、優良公民館最優秀館審査会が行われた後、各種表彰式及び伝達式が合同で行われました。

なお、来年度は、第四十一回全国公民館研究集会徳島県大会兼第四十一回中国・四国地区公民館研究集会徳島大会が、九月五日（木）・六日（金）の二日間、徳島市で開催されます。

平成三十年度 県公連専門委員会

平成三十一年一月十七日（木）、県生涯学習センターにおいて開催しました。正・副委員長の選任が行われ、委員長に若松委員、副委員長に岸尾委員が選任された後、永原会長から若松委員長に対し、「県公連が今後十年間で取り組むべき施策」についての諮問が行

われ、県公連の事業実施状況や二〇二〇年度全国公民館研究集会愛媛県大会についての意見交換が行われました。

平成三十年度 第三回理事会

一月二十四日（木）、松山市中央公民館において開催しました。

三十年度の事業実施状況、一般会計歳入歳出決算見込み、三十一年度事業計画案等について協議され、本年度事業が計画どおりに進捗していることが確認されました。

また、平成三十一年度の県公民館研究大会の主題や分科会のテーマについても、二〇二〇年度の全国公民館研究集会愛媛県大会までの一連の流れを踏まえて協議されました。その他、アンケート結果をもとに、全体会・分科会の実施方式等についても協議されました。

平成三十年度 郡市公連会長・事務局長研修会

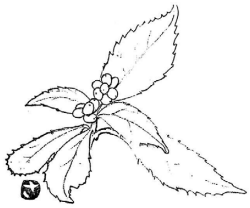
一月二十四日（木）、松山市中央公民館において開催しました。二十六名が参加したこの研修会では、県社会教育課担当係長から「公民館の現状と課題」をテーマに講話をいただいた後、事務局から今年度の事業報告、来年度の事業実施計画（案）・郡市公連会費分担金（案）・愛媛県公民館研究大会概要（案）について説明し、意見交換を行いました。

平成三十年度 愛媛県公連主事部会会「研究・研修会」

二月十四日（木）、愛媛県生涯学習センターにおいて開催し、十八名の公民館職員が参加しました。愛媛新聞社地域読者局から四名を講師に迎え、『何を載せる？どう載せる？公民館スキルアップ講座』をテーマとした、公民館報作成の基礎・基本的知識や技能を習得しました。

公民館報づくりの手順をはじめ、見出しの作り方やレイアウトのコツを学ぶとともに、実際に取材する「インタビュー体験」を取り入れ、実務経験豊富な記者の視点と丁寧な指導により、大変有意義な研修会となりました。

愛媛新聞社地域読者局の講師の方々には積極的なご協力をいただき、心からお礼申し上げます。



愛媛県公友会について

愛媛県公友会（若松進一会長・会員数三十三名）は、県公連、郡市・地区公連の役職員であった方、県教育委員会等で公民館担当者であった方、学識経験者や会の趣旨に賛同する方などが会員となり、本県の社会教育の進展や地域づくりに寄与することを願って、昭和六十二年に発足しました。

公友会では、「あつまる・まなぶ・つなぐ」を基本理念に公民館を愛する方々が「新会員」として集われることを心から願っております。

常に学び、情報交換を図るとともに、県公連・郡市（地区）公連・行政等とも連携・協力しながら、本県の公民館活動の活性化と生涯学習の推進に、引き続き貢献してみませんか。

新規ご加入の問い合わせ・申し込み先

〒七九一―一一三六
松山市上野町甲六五〇
県生涯学習センター
県公民館連合会事務局内
愛媛県公友会事務局
TEL 〇八九―九六三―三五八三
（ファクシミリ　同番号）

編集後記

◎　平成最後の発刊となる「伊予路」第百五十五号をお届けします。
　今回も執筆者を始め、多くの方々にご投稿・ご協力いただき、感謝申し上げます。

◎　本年度は、全国各地で地震や風水害等多くの自然災害が発生し、本県も平成三十年七月豪雨により甚大な被害を受けました。
　被災された方々に心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をご祈念いたします。

◎　県公連の最重要事業であります「県公民館研究大会」では、上浮穴郡公連・久万高原町教委の皆様に格別のご協力・ご高配を賜りましたこと、心からお礼申し上げます。
　本年度及び来年度（西条市）の県研究大会は、再来年度の全国公民館研究集会愛媛県大会に繋がる一連の県大会であり、運営上の見直しや工夫を重ねながら、その成果を全国集会に生かしてまいりたいと考えています。

◎　県公連主事部会「研究・研修会」は、公民館情報の主要な発信ツールである「公民館報」作成のスキルアップを図るため、愛媛新聞社様のご協力の下、「何を載せる？どう載せる？」をテーマに、実践訓練を交えながら実施しました。
　紙面づくりのプロの先生方から教示いただいた、『事実を的確に把握したうえで、全体構想を作成し完成させていく』という道筋・手順は、私たちが日頃行うすべての仕事や業務に通ずる「ルール」と言えます。この「仕事のルール」をしっかり踏まえるとともに、「仕事への思いや気概」を持ち続けることが、仕事や業務の質を高めるための要諦であると思います。

◎　私の「仕事への思い」は、不退転の決意を表す『不東』です。これまで、長い間行政に携わってきましたが、この間「仕事のルール」の徹底と「不東の気概」で取り組むことを仕事の流儀としてまいりました。
　今後は、県公連の事務局として、決して諦めない気持ちで、誠心誠意取り組んでまいる所存でございますので、皆様のご協力・ご支援を何卒よろしくお願いいたします。

◎　時代が大きな転換期にある中で、再来年度に全国公民館研究集会愛媛県大会が開催されることは、県公連・各郡市公連・各公民館にとりまして、次なるステップに向けての大きな飛躍のチャンスでもあります。
　県下の公民館活動に関わる多くの方々が、気持ちを一つにして挑戦していくことを心から願っています。

（近藤正典）

愛媛県公民館連合会機関誌
伊予路　第一五五号
発行　愛媛県公民館連合会
松山市上野町甲六五〇
愛媛県生涯学習センター内
発行年月日　平成三十一年三月二十三日
印刷　三創印刷株式会社
☎〇八九－九三三－〇二六八

公益社団法人　全国公民館連合会

2018年(平成30年)度 (2018年5月1日～2019年5月1日)

公民館総合補償制度

本制度は、公益社団法人全国公民館連合会(全公連)の制度です。市町村の公民館および自治公民館、また社会教育法に定める「公民館の目的」に寄与する施設等で公民館に準ずるものとして全公連が加入を認めたものは、名称を問わずご加入いただけます。指定管理者制度を導入された施設もご加入いただけます。

3つの補償で公民館活動をサポート

1.行事傷害補償

【災害補償保険(公民館災害補償特約、熱中症危険補償特約)+見舞金制度】

保険

- ■公民館行事参加者のケガを補償
- ■公民館利用者のケガを補償
- ■行事往復途上のケガを補償
- ■行事の事前練習や事前準備、後片付けでのケガを補償
- ■食中毒や熱中症を補償

見舞金制度

- ●急性疾病に、死亡弔慰金、入院見舞金をお支払いします。
- ●特定災害により公民館建物やその収容動産に損害が発生した場合に、見舞金をお支払いします。

【補償例】

●バレーボール大会参加者が転倒して負傷。

2.賠償責任補償

【賠償責任保険(施設所有管理者特約、昇降機特約)】

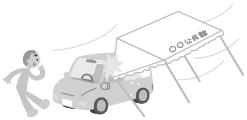
保険

- ■公民館の施設・設備等*の欠陥や業務運営のミスにより、第三者にケガをさせたり、財物を損壊したことにより、公民館が法律上の賠償責任を負担しなければならない場合に補償

※公民館が所有、使用または管理する財物への賠償事故などは対象になりません。

＊施設にある昇降機(エレベーター、エスカレーター)の所有、使用、管理に起因する賠償責任も含みます。

【補償例】



●テントの張り方が悪く風で飛ばされ、行事来場者の車を破損。

3.職員災害補償

【普通傷害保険(就業中のみの危険補償特約)+見舞金制度】

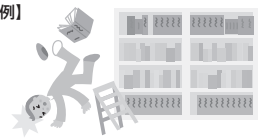
保険

- ■公民館事業や業務に携わる方の公民館業務中のケガを補償

見舞金制度

- ●公民館事業や業務に携わる方の病気や業務外のケガ、業務中の地震によるケガに死亡弔慰金や入院見舞金をお支払いします。

【補償例】



●職員が業務中に脚立から転落して負傷。

公民館総合補償制度の特長

(1) 補償範囲や対象者が広い、公民館専用の制度です。

●全公連が運営する『見舞金制度』に『保険』を組み合わせた公民館や類似公民館の専用の制度で、安心して公民館活動を行っていただけるよう幅広い補償になっています。

★行事傷害補償制度のここがおすすめ★

- ■日本国内であれば行事の場所は問いません。　※別に定める危険な運動中等は対象外です。
- ■行事参加者や利用者の居住地は問いません。
- ■公民館公認のサークル活動参加者や有償・無償を問わず公民館ボランティアや講師も補償します。
- ■公民館が他の団体等の行事に派遣する行事の参加者も補償します。
- ■宿泊をともなう行事も対象です。

(2) 年1回の手続きで安心です。

●年1回の手続きで年間の主催、共催行事が対象になり、個別の行事の通知は不要です。うっかりして保険の手配を忘れる心配がありません。

(3) 掛金の割引制度もあります。

●同一市町村内で10館以上まとめて加入されると、行事傷害補償の保険料と見舞金制度掛金に割引が適用できます。

●職員災害補償の保険料には、団体割引25%、過去の損害率による割引25%を適用しています。

このご案内は、本制度の概要を説明したものです。詳しい内容につきましては『2018年(平成30年)度版マニュアル 公民館総合補償制度の手引き』をご覧ください。
また、本制度全般のお問い合わせ、資料請求等は、エコー総合補償サービスまたは損保ジャパン日本興亜までお寄せください。

■引受保険会社
損害保険ジャパン日本興亜株式会社
営業開発部第三課
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03-3349-3820　FAX 03-6388-0157

■取扱代理店(お問い合わせ・資料請求先)
エコー総合補償サービス株式会社
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-6-9
TEL：0120-636-717(通話料無料)
FAX：0120-226-916(通話料無料)

(SJNK17-16435)作成日 2017年12月25日[1712K-㊙]